古史傳

十二

196
34
111

古史傳

自第五十六段
至第五十九段

十二

175
13
111

東京圖書館
和書門 國史類
二九一 函
三 架
四二 號
一七 冊

東京書籍館藏
LIBRARY OF TOKIO

古史傳十二上卷

明治十年納附

東京府士族
東京書籍館雇
高瀨久
男 鐵胤
孫 延胤 續攷
平篤胤謹撰

神代中四上卷

於是天照大御神以爲怪。示聞看天兒屋根命。出廣厚稱辭祈啓而。詔曰。頃者人雖多請。未有

若此言出麗美也詔出而。細開
天石屋戸而。自内詔者。因吾隱
坐而。以爲天原自暗。葦原中國
亦皆闇矣。何由天宇受賣者。爲
樂。亦八百萬神。諸咲耶詔矣。爾

天宇受賣。益汝命而。貴神坐出
故。嘘樂遊也。白矣。如此言出間。
天太玉命。指出其鏡而。示奉出
時。天照大御神。逾思奇而。稍自
戸出而臨坐出時。其隱立出天

手力男神。引開其石戸。取其御手而。奉引出矣。即中臣神。忌部神。以尻久米縄。控度其御後方而。白言従此以内。勿還入坐矣。是時以鏡。入其石窟。則。觸戸而小瑕矣。其瑕於今仍存。此即伊勢崇祕出大神也。

於是天兒屋根命と云ふ。詔曰まで。書紀石屋段第三一書。於是天兒屋命云〳〵。廣厚稱辭祈啓矣。于時日神聞之曰。頃者人雖多請。未有若此言之麗美者也。乃細開磐戸而窺之。といるを取て。文を作せり。○廣厚稱辭て。比呂伎阿都伎多閉へ碁登と訓べし。常言よりて。廣く厚きといへど。廣伎厚伎といふぞ古言のさはおる。多閉て。師の。水を湛ると同言ふて。滿足ハ以意おゆ。今世

比言て海淳の滿祀たまき依を云ふの為〳〵ゆと云も同じと言れし如く其神は御德を彌廣爾彌高ふ言舉盡に
を云おゆ諸祝詞ふ其奉る種〳〵の物名を舉て其事ゆ仕
奉依人の勞をさゆて太じく言舉るも本たその神を崇
むをゆ起きるふて稱辭竟と云ふ竟まと下第五十九段ふ祓
竟と云ふる竟も稱盡し祓盡す意おゆ加茂翁說ゆ万葉ゆ
むかくしとそ烏梅を折おり多努之岐乎倍米おを家持月立春の來とら
卿の追和し哥ふ春裏之楽終者とを免る終も共ふ楽み
を盈ひとと
れゆと有ゆ ちてかく稱辭祈啓し給ゆ依た何ゆ對ひて
白し給へゆと云むふ此たまお此時ふかく殊更て神事
麗美く種〳〵設備へて嚴重ふ仕奉ゆ給へ依ハ大御神ふ

獻ゆ給ゆと云ふも非ず外ふ貴神御坐に依て其神
ふ獻ゆ稱辭も其神て白し給ゆ依狀おゆ門人ふる新田
目道茂ゞ說ふ御鏡ゆ向て白給へる例ゆと云ゆ依た然
る說おゆ さるた此時ふ設備へて献らまさる物等の中
ゆ御鏡ハしも令作日像之鏡とも有る如く其
大御光を学び移せる御鏡おまだ有ゞ中ゆも主と云る
御物おまバおり故この御鏡ゆ向きて称辭白し給へ依
た さも有べき御事おり此御鏡後ふ大御神の大
神実とも成坐せる物れるを思ひ合せ奉るばし ○聞看
た上第四十二段ふ出とゆさ ○頃者た許能碁呂と訓ばし 即本書ゆ
訓ゆ ○雖多請た佐波邇麻袁世枵毋を訓ばし 此も本書の訓れま
まおゆ ふの大御言を思ふゆ大御神の石屋戸を刺て幽居
せ依おどとり神等ゆ各〳〵其〳〵ふ出御れふと伐請啓せ

依も。多に有しこと知られしとぞ。○未有若此言之麗美。此を師の訓ふをとぐへぞ。おゝの大御言は總ての意を按ふに。我が石屋戸を刺て幽居るとゆ。神とちは。出御はおとを請啓せるも多おまどゞ。かく言のうるてしきを有らざりしを。今兒屋命は祈啓に言は。かく麗美はいうれる貴き神は有て。かく申にやらむと。其詞に甚く感ぬやしみ給へるおぞ。○細開而。本曾米爾阿祁氏と訓べし。此米は所見の切りとる辭おぞ。拾遺集物名に。おぢくら免を隠して。難波津は闇目ふのみぞ。云〻と免る目も。是に同じ。○自内詔者。本に内告者とぬるを。師の此上に自字を補ひ。告は私に替とるおり。師云。此は沼河比賣段に。未開戸自内歌に曰。とぬるに似ある文おぞ。内與理能理給閉留波と訓べは。○自暗師云。おは自は。上の自我勝焉云而。とぬる自に同じ。其意彼処に同じ。下に自照明矣。とぬる自も是おぞ。○皆闇は。美那久良祁牟と訓べし。古言おゆ。此祁牟は加良牟と云に同じ。例は古き哥に多し。○以爲は淤母布袁と訓べし。此袁は爾と云むが如し。○何由は。那杼氏と訓べき。本に由下に以字。問言は叙と云ことの。れぞ無ても聞もきぞ除き。○咲耶は。和良布敘を訓ばし。常にも云へど。古言おぞ。此は怪みの餘に問給ふおぞ。○益は。麻佐理氏と訓べし。但し此は借字に。○嘘樂遊は。本は歡喜咲樂とぬるを。師の歡喜咲の三字を。惠良岐とゆ。樂字を阿蘇夫と訓れとるに依り。嘘樂字は書紀に取り。遊字は私に加へて文を

作し。嘘樂二字を惠良岐と訓み。即書紀ふたゝ訓り。此も其本書よも。惠良岐おどゝ
ゐ。ゐもむ。此字を塡られしよ遊字も常も如く阿曾夫
て決免て古訓あるべくおぼゆ。
や訓ぎし。惠良具とも。師說ゐ咲榮樂むを云。續紀廿六大嘗祭豊明の
詔よ。御酒乎。赤丹乃保仁。多末倍惠良伎云〻。まと三十廿
詔ゐもかく見え。万葉十九よ。豊宴見為今日者云〻。千年
保伎。保伎吉等餘毛之。惠良〻〻ちて此も宇受賣命も謀
尓。仕奉乎見之貴佐。あど云ゆ。
て申ゆ詞ゐて。己ゞ俳優や諸神の咲とを合せて。眞實ゐ
おもゝろく。樂みゐ招ぶさゐゐ言おせゐゐあり。と云ゆ。ふ
記傳八卷見るべし。ちて惠良岐ゐ嘘樂字を書れしも。玉篇ゐ。嘘同
嘘大笑也と云るよ依て。此字を取ゐ〻。もおも大笑ふ意
ゐみゐて。樂みの意ゐ兒故よ。樂字を合せて書れしゐる

ぎし。亦是は就て按よ。神楽を加具良と訓むことも。もと
神惠良てふ言ゐ。加牟も加具やあり。惠のはぶゝり
とるよ。其意を得て。神楽字を塡さるべし。牟も久の
濁音ゐうゐ。其具よ宇韻云れも。惠のもぶゝるべき語
勢ゐるをもく思ひ辨ふべし。ちて惠良の惠も。咲の惠と同く。嚴笑負の
れゐ。也も即ち
ま〻と笑の和良も。惠良と同言ゐて。万葉歌ゐ。保伎吉
等餘毛之惠良惠良爾。ゐどゐゐゐを思ふゝ。本も。咲ふ狀を
也出とる言ゐるぎし。世よも惠良〻〻笑ふゐど云免也。
まさけら〻〻笑ふと云も。この轉れるゐり。まとへら笑
ゐども云ゝ。出羽の秋田ゐどよて。さゐがう事して。甚く
笑ふを。へら笑ゐと云。此も同言の訛きるゐゐべし。○其鏡も。即上文も賢木よ懸
と云ゐ八咫鏡ゐゆ。○示奉は。師云。美世麻都流と訓べし。顯
宗紀。孝德紀。外どゐ。奉示とゐ也。神武。神功。仁德ゐどの卷
よも。示字を。美須也訓り。

ちて汝れ御鏡を見せ奉まるからは。日神の御光うは也て。全等同く照かゞやくを以て。汝命は勝りて貴神とた。即此御鏡を申おせるもれおゞ也。如此為るた。いと浅たゝおるは似とまゞども。上代の意おり。後世のおゞろかざりし心を以て。疑ふおと勿れ。さて此御鏡た。日像鏡と申て。日神の御像を摸しはと其御光のうおまるを以て言おれず。汝命と。等しき神とこそ申にべ也。勝りて貴と云るハ。甚しく云いおせるもの也。かれ日蔭蘰を去ゐるも。上は此鬘を。頭をり垂ゆゝた。日光の乃だもきを。さし隔おる料おりと云ることゝ。此は思ひ合にべし。雑を鳴せとるも。皆此貴神坐て。世を照し給ふおと。日神は同なをし玉。示しゐるもれおゆ。纂疏の説おど。非言れり。○逾思奇而とた。師云。此御鏡れ。已命と等く照明々きを御覽して。實は宇受賣れ申せる如く。貴神坐

におとゝを。奇み御思おは。上は怪み以爲せるを承て。逾を云おは。○稍た。師説は今世の言は。漸くは少の意は見ゆべし。稍と少とた語と云意おり。と云を おれど。の意通へり。○臨坐之時師説は。臨た。宇鏡は宇闕を宇加く不。又乃曾无とゐる如く。能曾久と同じ。今思ふた。能曾牟と。能曾久とた。意異おるゞ如くおれど。中務家集は。池ての岩きゐ流松は藤かゝまは。と云ひ。源氏椎本巻は。水はれぞれ也ゐる廊は云くおぞゐり。此らた臨を能曾久と云。今は能曾伎坐を。臨坐とゐまゞ。相通ひて本同言おゆ。但し此た。とゐまゞ。物の間おどとり闕とた少異は自戸出而て。ゐゞ事の情状をうかゞひ見る意おり。とゐは。ちて上は稍從戸出而とゐる故は。石屋戸れ外は。出御るおと聞

もまども然らば。細開ある間をば。稍御體を出して。臨坐
ふとしおば。下文ふ。奉引出と云るを以て。思ひ辨ふべし。
戸外ふ出御るおらむふ。奉引出とて有ま
じくこそ。故稍は。少の意ありと。上ふ云りき。○引開其石
戸は。本ふ此文おし。今ハ書紀。古語拾遺共ふ。天手力雄神。
侍磐戸側。則引開之者。とあるふ依て補ふり。必有べ
き文おば。かの細開給へりし石戸を皆ゞら引開る由おり。
去ゞ爲年とて犯も。御戸掖ふ隱立し者ふ。世ふ此時石戸
を投給ふるゞ。信濃国ふ落て山と化れる。そき戸隱山お
りと言傳ふふた。美濃国。喪山おゞの故事を思ふふ。然も
有べくおぼえとり。春日社記ふ。天手力雄神。信濃国戸隱
明神是也。と有た。傳ふるる事ふやまと信濃国地名考ふも。
古説を引て。戸隱神社。手力男神おる由云り。ちて戸隱
た。トガクリと訓べきを。訛ばて。トガクシと言ひおらん
るふ
や。○取其御手而は。師云。此取字を。舊く多麻波理と訓

ば。書紀ふた奉承と書ちれど此訓た。後世の語ふ支おれ
る。其をも然訓り。
ば。猶字の隨ふ。登理氏と訓ばし。○奉引出矣。本ふた引出
とのみあり。
今ハ書紀ふ。引而奉出とる。師説ふ。此りて。此神れ名義ふの
るふ依て。奉字を補へば。
らはまあば。戸城引開むふた。本をゆれおと。御手を取て
引出し奉年ふも。手力の優ふらむ神を充ばきわざおゆ
かし。延喜六年。日本紀竟宴。阿刀春海。哥ふ。止已也美毋多
乃之支美与止。奈利介留波。安女多知加良乎。多須介
安利介。とおゆ。ちて此神かく石戸を引開あ乃へあふ依て。
亦名を天石戸別命。まと天石都倭居命と書り。まと明日名門命とた
申ばおゆりば。おお次段ふ注ふを見るべし。○中臣神とた。天兒屋命を
申し。忌部神とた。天太玉命を申せば。古事記ふた。布刀玉命とれみ。ちてまど。縄

を引ことに、必二人してもの
べき事故ゆ、書紀を取まり。○尻久米繩に、師説ふ。今い
ふ志米繩あり。約むれば、おのおのら理久い署て、志米と言ふ〜あり。又思ふ、志米に標結あどの意
う。然らば尻久米と物に一ッよて、名に別あるう。但し標も本に、この尻久米とり出とる事ふや、然らば活用て志牟
とも云に、や〜後のことう。　土佐日記ふ。おへのかどに比志比く米あは
とあり。尻に藁の本をいひ。久米に許米ふて。許毋理を久美と云ること
り。師の冠辞考、さべ竹の條ゆ委く見も。然れば其例ゆて、許米をも久米と云べきこと疑ひあし。藁の尻
を斷去ぐてされぐら許米置とる繩あり。許米とに、枕冊子ゆ牟久呂許米あぞ有る許米ゆて、俗ゆ某具留米と云是あり。具字の意ふ近し。今云、谷川氏も既く、尻指藁本、倶梅、篭之也といり。書紀ゆ。端出之繩と作て。此云斯梨倶梅儺波。此下ゆ、示有る四字に、後人の加とるあ例べし。　ゆ有ふて知ばし。端出とに。斷ざる藁

に尻の出ある由ゆて。即後世の志米繩の狀あり。此繩ゆも、くさぐさ理を云説有きど、みあ例れひゞあとれり。和名抄ふ、顔氏家訓に、注連字を挙て、之利久倍奈波ゆ云、きどとく當れりとも所思ぐ。まと加茂大人説ふに尻に後方に意。久米に限目ふて。今天照大御神の御後方ゆ引ひとしある。限目の繩あ例意あり。と有るも然るあとれり。孰あらむ決ゆ巨しとあり。されど篤胤に、師説ふ從べくおぼゆ。　ちて此を亦。日御綱とも云ふ。其に次段ゆ見え。ある。○御後方に。師云。美斯理幣ゆ訓可し。齊明紀ふ、後方を斯梨敝と訓る例あり。万葉二十ゆも、等能〜志利弊あぞ有り。即目方ふ對とる名ゆて。尻方の意あり。○控度師云。如此爲し所由に。次に語ふて知らる。後世ふ。神事ゆ引亘にも同意ゆて。隔

をおせるれ尸。○勿還入坐矣た。本ヨ不得還入と有を。其た物遠おきだ。更米。訓ハ師訓ふ那加幣理伊理麻志曾と訓ばし。○是時以鏡入其隨へり。石窟則。是とり大神也まで。書紀を取て文を作れ。古の鏡た。彼八咫鏡を云。さて大御神ハ出坐る御ゐのと牙。此御鏡を入る古とた。深き所由ゐることおは可し。○觸戸而た。石屋ふ入ゐ〳〵と。戸ふ衝觸と依由れゆ。此た大御神を引出奉尸て。復還入坐むおとを恐き思ひて。尻久米縄を引亘しおどゐのはゑ〳〵おく爲れるまゝふ。過尸て戸ふ突當とるふや有らむ。○小瑕矣。おた師のイサヽカキズツキヌ。を訓れしよ依とれど。少う更免て。須許斯伎受都祁理と訓ばし。瑕た字書ヨ。玉の疵を いふとし見えとり。石戸ヨ觸ゐら

むよた。瑕付こと有ばきおを尸。此を以ても。大御神のおもふきとるだりよて。瑕れくおとた有まじくおそ。但有しことを知べき物ふり。ゑ〳〵の御屋おらむよた。突し此た。過りて爲れる事ふた ゐのきぞ。幽契ゐる事とぞ思はゐ〳〵。其た始ふ大御神。齋服屋ふ御坐て。神衣を織尸給牙依時ヨ。須佐之男命。その屋樣を穿て。天斑馬を墮入さはひしうだ。大御神見畏まして。梭を以て大御身を傷ひ給牙る事を思ふヨ。此御鏡ヿ瑕付るおとた。彼由緣ふとる事ふて。末終ふ御靈實とおり給牙依御鏡おる故ヿ。かくまで幽き因緣の具れるふた非じう。と想像奉らき爲尸。ゐのれのしよ。○其瑕於今仍存。古の事ハ。既ふ上ヿ云へりき。

第四十五段ハ三面の神鏡の事を取總て云へる処披見るべし。○此即伊勢崇祕之大神也。古の事も。上第四十五段ハ既ク注へ。その委き事ハ第百三十四段まと垂仁天皇巻二十五年の処ハ云ふを見るべし。

於是天照大御神。遷坐其新宮。

天兒屋根命。天太玉命。廻懸日出御綱而。令大宮能賣命。示云大宮比賣命。示名天宇受賣命。示名矢出波波伎神。宮比神。示名世内侍。以善言美禮也。令天石戸別命。示名櫛石窓命。守衛其殿門。而天太玉命。大殿祭。御門祭供奉矣。故天侍其御前。今世内侍。和君臣出間。如令悅懌宸襟也。示名豐石窓命。

宇受賣命者。御巫猿女君等出
祖也。次天石門別神。此神者。御
門出神也。亦名謂阿居太都命。
亦名天背男命。此者犬養縣犬
養連。宮部造。今木連。巨椋連。大
椋置始連等出祖也。

其新宮とは。手置帆負命。日子狹知命は造立とる。かの御殿なり。○日之御綱は。本書に。今斯利久迷縄是也とあり。是也の間に。日影之像の四字なるを。今は畧て引り。其は師説に。これ附會の説なり。藁の尻は出ゐるを以て。如此さまに言せる。更に上代は意はゝなくて。と有ふらきと。然れど。尻久米縄の一名なりけり。那波てふ言は義は。口訣に直なりと云り。此は漢籍家語に。木受縄則直。などなるに依る説は。と聞ゆれど。万葉に。飛彈人のうゑ墨縄の。と直きことは譬ゐるなぞを思ふに。然も有らむも知べからず。まと那比ふても。あるべし。○廻懸は。今もはる如く。宮の四方に懸廻らはは。上の控度は。ゐ〻石屋の戸にはみ引亘せる由なり。

控度と懸廻て語ふこのちて石屋戸ふ縄を引亘と注て。差ての巳思混ふべらばば大御神の還入坐むおとを思ひておほ注。此新宮ふ引廻ある也禍神ハ入來てまゝも禍事せむこと我恐きてあ巳。其ハ下ハ引る祝詞文の意を尋て思ひ辨べし。後世ふも神事のをめ尻久米縄を引廻らばおとを也。即此意おめ。或説ハ今雖曠野中強暴民視亘一縄而莫漫加足者豈非神化之深乎。読者宜致思焉と云る也然る言おり。ちて此縄ハ状を。書紀口訣ふ。麤藁左糾出端といひ。纂疏ふ。端出者。綯索而不整雪其芯端。おぞ毛のるよて。今も爲る去来縄の状おること知ばし。ハ。おこの外ふ諸書ハ云る説ども毛のまど。皆非おる巳。○大宮能賣命。宮比神。矢之波〻伎神。御名の義下ハ云ばし。○令侍其御前。御前を。

大御神の御前ふおめ。侍を師説ふ。佐毋良布と訓ばし。佐を眞ハ意毋良布ハ毋流を延とる言ハて。毋流ぞを何事ふまれ心を於ハて伺ひ居るを云。於祢ハ物を守ると云も。又人目なも流おぞ云安此意おり。又目を於れて。物をおく〻と見るを。まもると云も此意おる巳又候風おど云も。泊舟のとき風なを待伺ひ居るを云て。同意おり。されぞ仰せ賜ふ事おぞ有らぞ奉らむと伺ひ居る意ふて。凡て君の御前ふ在るを。佐毋良布と云おる巳。垂仁巻ハ。木實持參上而侍。履仲巻ふ。既平訖參上而侍。万葉二ふ。雖侍候佐毋良比不得氏。二十ハ。佐毛良布等。和我乎流等伎爾おどの巳。ちて此をり轉めて。後ハ。侍まゝ侍ふ処を指ても侍ひ居る人を指ても侍といひ。を云くめ轉りて。あゞ對ふ人を敬ひて云。語ハも。己ゞう

ヲの事はた凡て添言ことゝあきめ譬べむ見るを見侍ふ聞を聞侍ふと云ゲ如し。さて此言も。もと佐母良布ゐ侍を中昔をりて佐牟良布といひ又加の添て云辞の侍ふゑむ訛て佐宇良布を云ひ又約て曾呂ゑも云ひいを俗し。さて又波牟倍理と云言ゐり。波倍理とも云めいさ佐母良布と全ら同じさまゝ用ひてもとめ言の意も甚近し故同く侍字を書あり。但昔をめ佐母良布ゐた侍字をも。候字をも書ゑ。波牟倍理ゐた侍字をのみ書て候字ゑ書とゐし。こを波牟倍理ハ。あゞ貴人れ御前ゐ在る意のみゐて。伺ふ意ゐあき故ゐやゐらむ。さて続紀宣命ゐどゐも。侍と云こと多し。皆佐母良布と訓ても。波閑理と訓ても。をろし。○今云。此師説ゐ記傳十四巻ゐ。大圀主神の八十坰手隠而侍と申給へる処ゐ記されとるゐを。此ゐとりて注せり。ゐ波倍流てふ言のもとれ意をも。委曲ゐ解れとるを。此ゐた洩しつ。本書ゐ就て見べし。ゑ云れしゐて。此神を御前ニ侍ゐ志ゑと侍事の由をも知べし。○内侍ハ。宇知都美佐牟良比と訓ぢし。即本書ゐウチツカセフラヒとゐる古訓ゐ依れ。カセは三サの古假字ゐり。

フゐ音便ゐれバをらば。名義男ゐ外事を専と仕奉るを。内御屋ゐ侍ひ仕ふる由ゐ。後ゐハ字音ゐ那伊斯と称ふゑり。ちて此官の始を。或説ゐ。此の大宮賣命の故事を。起れる由云侍ゐ。信ゐ然る説ゐて。廣成宿禰ゐ。ゐ記さきと侍趣も。縁也とゐて言ハ祢。さる意とゐ聞えゐ。斯て後ゐ。此職掌を定て。尚侍。典侍。掌侍を別られゐめ。尚侍ハ。ナイシノカミ。典侍ゐ。ナイシノスケ。掌侍ゐ。ナイシノゼウと唱ふこと。禁中名目抄ゐ見えゐ。後宮職員令ゐ。尚侍二人。掌供奉掌侍。奏請宣傳。撿挍女孺。兼知内外命婦。朝參及禁内。禮式之事。典侍四人。掌同。尚侍。唯不得奏請宣傳。若无尚侍者。得奏請宣傳。掌侍四人。掌同。典侍。唯不得奏請宣傳。と見え。尚侍。典侍。

掌侍を云ばなれて内侍と云ひ。其中より以一内侍為句當禁秘御抄より見とり。此内侍あちの常ゐ侍居る局を内侍局とも内侍所とも云ゐ也。御坐の神鏡も此局ゐ御坐て内侍等の侍ひ仕奉る故ゐ内侍所の神鏡とも申あり。まと直ゐ神鏡を内侍所とも申せり。さてしゐ内侍の仕奉る事本も全こゝ此縁ゐとることあり也。○善言美詞も袁加斯伎言宇流波志伎詞ゆ訓べし。此も本書ゐ訓を闕とまと。和君臣間令宸襟悦懌とあるゐ就て新ゐかくも訓ゐあり。善言とハ天皇命の大御心れ。むに〻〻れ坐る時ゐど其を休ゆ奉らむ爲ゐ。態とをかしゞゐ物言ゐどして御心なと也奉るを云ばし。美詞ゆも其御怒也坐ゐ時ゐど詞を美くして其ゆ和ゐ奉也御心をとゆ奉るれゞを云ばし。○和君臣之間とも天皇の御心

ゐ應ざる事ゐのりて御臣とちの大御前を憚也畏むゐと
の有ゐ時ゐゞゐ其を取直し和に由れゆ。○宸襟も大御
心と云言ゐ借まる漢字ゐゆ。美母能淤母比と訓べし。御
物想の義ゐゆ。ちて大御心を悅しむとも上ゐ云へる如く
ゐて和し直し悅し奉る也云。但し此ハ今世云くとゐ
大同の頃も内侍の内ゐ仕奉ゐ状の斯在しことを知べ
し。然るを令文ゐハ少ゝもの〻るゐ。ゐ〻ろむへの見えざ
るも嚴ゐる事のみ記さまとるゐて内侍の仕奉る事の
状ハ必此ゐ見えとる如くゐゐべき事とこそ所思れ。
ちて内侍の仕奉る狀も如此ゐて其も大宮能賣命の此
時然して大御神も御心をと也奉まるゐ。れらひ因るゐ
とゐ也其證も此神ゐ申に祝詞ゐ大宮賣命登御名乎申

事波皇御孫命乃。同殿能裏爾塞坐氐。參入罷出人能選比所知志。神等能伊須呂許比阿禮比坐乎。言直志和志古語云夜波志坐氐。皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流。比禮懸伴緒。手襁懸伴緒乎。手蹟足蹟古語云麻我比不令爲氐。親王諸王諸臣百官人等乎。己乎乎不令在邪意穢心無久。宮進米進宮勤勤之米氐。咎過在乎波見直志聞直坐氐。平良氣久安良氣久。令仕奉坐爾依氐。大宮賣命止。御名乎稱辭竟奉久登白と。の卍。おのの全文は。神武天皇卷の本文ふ舉おきむ。凡て此意は。彼処ふ注ふべし。是ふて御名の義も。御功のおやも知られあ卍。かく君と臣とは御間取持ち。侍あ万ふ德は。卓れて大ふ坐ゞ故ふ。神祇官の八柱の神は連ふも祭られ給ひ。但し此八神の中ふ。此神をとるふて。其は貞觀おゞとりた後おゞるべく所も祭給ふる事は。後ふ加へ思あり。其由ハ。神武天皇卷ふ委くいふばし。

ふ仕奉る官人等ハ更ふも云は爻古くは末くは人まで祭を外して。其御幸ひを祈白せるおとふおむ有りる。其は兵範記ふ。保元三年正月九日。殿下宮咩祭如例。右大臣殿御方初有此儀云〻。家令大舍人允紀宗頼爲祝師と見え。伊呂波字類抄ふも。宮咩祭。正月十二月初午日。院宮諸家祭之と卍りこの諸家祭之と卍るふて。誰も祭卍しこと知ばし。拾芥抄ふ。其祭文を載らきあ卍。其文ふ。某年某月。壬午。年加中仁月乎擇比。月加中仁日乎擇比。日加中仁時乎擇天。挂毛畏支。宮咩五柱笠間乃廣前仁。某恐美恐美毛

申給久。五柱とゐる心得ゲ無し。此れ後より配祭まる神の。四柱ありしはやさて笠間と申ばこともも未思得ばうおぼ物語。囮もおりの巻より。つぎのふさより。女れ手より。て今日おらむ。からうじて。一ゐ祈りおる。ひらでくぼて。うれ。れどゝ祈ぎおとも知らばゐ。ゐ。より。笠間より。れ神の。おゐのる。くゞてゐ。ゐ〳〵云〳〵と云ひ。実方家集ふ。ゐ。ふ坐ば笠間の神のふゝゐ。せむ。ふりふし中をいゝで。とれましと。詠るおどれ。決て此より由ゐる事おらむを。後人をく考ゐてよ。絹波乍編。綿波乍結。進物波高抔加彌高仁。飯乃方毛利加仁。清酒乃早仁。堅酒乃堅樹乃忽仁。餅乃持天榮仁。鯛乃平仁。鱒乃彌益〻仁。鯛乃好美好美仁。鮑乃片罔仁。蠣乃搔寄天。薺乃庭佐良須。嚴久聞食受納給天。壽長久。身全志天。天地乃不祥。内外乃惡事。未萌以前仁。兼天波遠久拂比退介給天。官爵如意仁。叶志女給天。萬世仁子孫繁昌門止有志女。夜乃守里日乃守里仁。常磐堅磐仁守里幸戸給閉止。恐美恐美毛申須。此れ今井似閑ゲ。万葉緯より引る本飯れカタカユと訓さり。和名抄より。饘。依て。彼此字を正して引るあり。加太加由と訓り。薺の訓はニハナゥ。是ふて其祭のさは供進物ふぞれ種〻も知らまとゐ。ちて此祭文いと上れゐし世の文とハ見え祢ど。むげより下まる世の物とれ見えぐまと餘れ祭文の例と比ぢ思ふふ。おれおゝら文のをゝしげより聞も係れ。所由ゐる事ふるぢし。さて上件れ故実より。時れ。誰もをく祭らでハ。得有まじ。れ神ふ係ま。今世ふれ。祭る人女をさ〳〵聞もる事おきハ。故事を尋ぬる人の。少き故ふらむゝし。ちて此神を祭まる係社れ。神祇官の八神殿れ外ふも。神名式より。造酒司坐大宮賣神社四座。並大月次新嘗。文德天

皇紀。齊衡三年九月。造酒司酒甕神。此て宇迦之御魂神の雫代あり。其て酒殿神の神躰を。根倉ミカと云ちし。本記より有りて知るべし。從五位下。大邑刀自。小邑刀自等。竝預春秋祭と有り。おれより依きて。相殿より坐。三柱を。酒甕神。大邑刀自。小邑刀自と申すや。さて大宮賣命の。造酒司より祭らき給ふことハ。大御心を悦しめ。仕奉人とちれ。手蹟足蹟あどてらせば。侍て。しめ給ふ御功より依ことあるべし。まと式ふ。丹後。国丹波郡。大宮賣神社二座名神。大。貞觀元年正月。丹後国從五位下。大宮賣神。從五位上。と国史ふ見ゆ。まと式より。武藏国埼玉郡より。宮目神社あどてのり。はと稲荷神社て。注式ふ下。社。大宮女命異本より。大宮命婦田中社とあり。中社。稲倉魂命。播百谷神也。一名豊宇気姫命。○鍬胤云。谷て穀と同音の字故ふ。借て書るあり。上社。猿田彦命とてのるハ。をく事實より符ひて。後人のおしてのるより。思寄るはじき說ふゆ。扱まと笠間と云名より て祭まるて。式ふ越前国坂井郡ふ。笠間神社。加賀国石川郡より。笠間櫻寶神社あぞてのゆ。和名抄より。加賀国石川郡。笠間。加佐万と見ゆ。笠間神社此処あるばし。常陸国より。笠間を云処てのり。由てのるり。さて此神はかく太じき有功の神あるを。記紀共より傳洩しあゆ。然るを拾遺ふ。其事蹟を傳あはて。おをれき賜物あり。はり。然るは下第六十一段。ふ舉るが如く。是。太王命久志備所生之神と有て。大宮能賣命は。宋ふ常ふ殊ふ功德ある神ふはふ故ふ。其生坐る時ふ。久志備ふはふ祥有しれはて。何れはふ事の有しゆ。傳あはれて知ばてのらば。かくて久志備と云語意は。

天照大御神の生坐し時ゐ。伊邪那岐大神喜曰。吾息雖多。未有如此靈異之兒。と詔ひ。丹後風土記ゐ。與謝郡郡家東北隅方有速石里。此里之海有長大石前。云〻。先名天梯立後名久志備濱。然云者。国生大神伊射奈藝命。天為通行而。梯作立。故云天梯立。神御寝坐間。仕伏仍怪。久志備坐故。ゐと皇美麻命御天降の所ゐ。日云久志備濱。云〻。と見え。ゐと久士布流多気とも有れど。クシビクシブルと活用く語を見も。是らを考合せて。久志備と云言義をも辨ぢ向襲之高千穂槵日二上峰と有ゐ。ゐと久士布流多気とも有れど。クシビクシ

ち。然れど大宮能賣命と稱ゐは。萬幡豐秋津比賣命亦云。拷幡千〻比賣命。ゐ。大御神の御前ゐ侍ひて。宮内の事取もち給へ

ゐ。功を稱へゐ亦名ゐて。豊秋津比賣命ゐ。產靈神の御子ゐ坐まいこと。上ゐ見とり。や

ゐて天宇受賣命ゐ我有れる。其ゐまゐ上ゐ記せる。大宮

賣命ゐ事蹟をゐく讀み熟思ふべし。決ゐて宇受賣命ゐるぢき事狀ゐて。拾遺の傳ゐ如ぐきを思ふゐも。天鈿女命。其神强悍猛固。故以為名。以眞辟葛為鬘。以蘿葛為手繦。云〻。令天手力雄神引啓其扉。遷座新殿。則云〻。令大宮賣神侍於御前。如今世内侍。善言美詞和君臣間。令宸襟悅懌也。豐磐間戸命。櫛磐間戸命。二神守衛殿門。とゐ。此文豊磐間戸。櫛磐間戸命。と申せるハ。石戸別命の亦名ゐることを心ゐ留おきて見る時ハ。是やゐて手力雄命ゐ依ゐく思得られ。其事情ゐ思ひ合せて。大宮賣命。やゐて宇受賣命ゐるべしとゐ。このゐハ。誰も思得ゐべき趣ゐ。然のみゐらば大宮賣命の事蹟ゐ。

悉く宇受賣命免きとる。まと宇受賣命も。然でこの巳太じ
紀神おゐよ。其を祭ゑゐ社とても。一ゐゐ有ことおくて。
必此神を祭るぢき祭事ゐ。大宮賣命を祭ゑるおどを以
て曉ぢし。そも上、ゐ引とさる。大殿祭の詞別、祝詞、まと宮、咩、
祭文おどの状を思ふ。決めて宇受賣命を祭
るべき祭事
あるをや。
おゐ言ても書紀ゐ。素戔嗚尊の。既ゐ高天原
を逐ても後ゐ。復上巳給ふ處ゐ。天鈿女見之而。告言於
日神と見えある事蹟を。此ゐ令大宮賣神侍於御前とゐ
る事蹟。まと此神ゐ白に祝詞て。同殿能裏爾塞坐氐。參入
罷出入能選比所知志。と云るおどゐ思ひ合せて。御前ゐ
侍ひ塞めて。參入罷出る人の選を掌にるおとも。必强悍

猛固ある宇受賣命おらでも。得勸むまじき事を辨へ。宮
賣。宇受賣。同神ある事を思ひ決む可ち。猶正く思決むば
き証ゐるを其も
第五十四段。天宇受賣命の。御名の出さ
る処ゐ云り。此と合せて思ひ辨ふべし。ちて又拷幡千々
比賣命と。同神れ依べく所思る由も。伊勢大御神の。相殿
ゐ坐まに二座の神を。内宮儀式ゐ。天手力男神。萬幡豐秋
津姫命也。とゐるハ正説ゐ。ぢら。此神等の相殿とゐ巳給
ふる。豐受大神の。外宮ゐ鎮座しゐどとり。も事ゐて。其
ゐ以前も。此二神を合せて。御戸開神を申せし神等れ
巳。此等の事委くも。第百三十四段。此二柱神
者。幷祭伊須受宮。とゐる処ゐ云を見べし。其も大神宮
本記ゐ。天照大神一座。相殿神二座。左天兒屋命。右天太玉命。とありて。

是亦いと正き傳あり。此事も。第百三十四段ゴ委く注べし。別ゴ御戸開(アケ)神二座。天手力男神。拷幡千々姫神とあり。鎮座本記。鎮座傳記。鎮座次第記。神名祕書。鎮座本縁も同じ。此をあ〳〵れ傳ゴ合せて考るゴ。手力男神を。御戸開神と申て祭らむことは。石屋の戸を別開(ワケヒラキ)あるへきぞ。然ことゴある歟。拷幡千々姫命を。宇受賣命と別神としては。御戸開神と申て祭らむおとは。更ゴ由なく。手力男神と共ゴ祭リて。御戸開神と申ゴ可きは。必天宇受賣命(サルメ)なるべきものゴあり。上ゴ云へる説どもを。考ヘ合せて曉べし。然きども拷幡千々姫命と云説は。諸書の説とく符(キコエ)て誤リとも所聞ざゴ侯は。決て宇受賣命亦名大宮賣神と同神ゴあるべく所思あり。此おと委くハ。第百三十四段御戸開之神也。と有る処ゴ云べし。○天石戸別命。櫛石窓命。豐石窓命。此段は都て。拾遺を取て記ゴ侯おきど。豐石窓。櫛石窓と申ゴは。石戸別命の亦名と爲おるは。古事記ゴ據(ヨリ)てゴあり。また此神。やゞて手力男命ゴ坐ことは。上ゴ委く云りき。記傳ゴ。石門別てふ名は。石屋戸段の時。天石屋の戸を開き分けとる意の如く聞ゆ。然きど。此神ゴ然る由はあしと云きしは。考れ糊ゴ。あり。名義。櫛豐ハ共ゴ例ゴ稱名。窓は眞門(マト)の意ゴあるべし。窓と作るも。間戸と作るも。もと共ゴ借字ゴあり。○令守衛(メテモラニ)其殿門(ミカドラ)而。此は彼新宮の御門を。守らせゴある由ゴて。其は石屋戸を引開(キ)ゴ侯功を。其ゴ負(オヒ)て仕奉らむ。外ゴ。此因緣(イハレ)ゴ依て。此神を御門神とは祭るゴおとゴあり。其は古事記ゴ。石門別命。亦謂櫛石窓命。亦謂豐石窓命。此者御門神也。また拾遺神武天皇段ゴ。櫛

磐間戸神。豐磐間戸神（今御門巫所奉齋也）と見え。神名式ゐ。神祇官西院坐御門巫祭神八座（並大月次新嘗）櫛石窓神。（四面門各一座）豐石窓神。（四面門各一座）をゐる是ゐ。（櫛石窓豐石窓と申に二名を二神として四方の御門ゐ各一座おゐて八座ゐり）清和天皇紀貞觀元年正月ゐ。此二神ゐ。

祭る故ゐ。

從四位上を授奉給ふ由見ゆ。（おれまでハ無位ゐりき）四時祭式ゐ。

五月十二月。四面御門祭。（御門巫行是）と云ゐる。此神の祭ゐり。

祝詞式ゐ。其祝詞云ゐ。（其大殿祭の次ゐ上ゐ挙ゐる大宮賣命ゐ白に祝詞云ゐりて其次ゐ載られとり此ゐ故ゐるゐとゐり）其詞ゐ。櫛磐牖。豐磐牖。其由ゐ神武天皇卷ゐ云ふべし。

命登御名乎申事波。四方内外御門爾。如湯津磐村久塞坐氏。四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾。相麻自許利相口會賜事無久。自上往波上護利。自下往波下護利。待防掃却言排坐氏朝波開門夕波閉門氏。參入罷出人名乎問所知志。咎過在乎波神直備大直備爾。見直聞直坐氏。平良氣久安良氣久。令奉仕賜故爾。豐磐牖命。櫛磐牖命登。御名乎稱辭竟奉久登白。と云ゐ。（まゐ祈年祭祝詞ゐも御門能御巫能称辞竟奉皇神等能前ゐ白久櫛磐間門命豐磐間門命登御名者白氏辞竟奉者四方能御門ゐ湯津磐村能如塞坐氏朝者御門開奉夕者御門閉奉氏疎夫留物能自下往者下乎守自上往者上乎守夜能守日能守ゐ守奉故皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎称辞竟奉久登宣と見ゆ。月次祭の詞も同じ。）おゐ此時の功を本として。稱と云辭ゐるを以て。此神ゐ御門を守衛し給と云ゐ。禍津神等の入來て。まゐ災禍事せむゐと

を思ひて外る事義を曉べし。又かく御門の開閉をさ司ふ。掌給へ卍し故ふ。亦名を阿居太都命と申せるおと知可し。此事上第四十九段天語連の処ゑ云へると合せ考ふべし。ちて神祇官西院の外ふも。神名式ふ。丹波国多記郡。櫛石窓神社二座。並名神大。とあり卍。二座のうち一座ハ豊石窓神ゐることと決し。此社のおと。神祇伯顯廣王記ふ。本官西院北舍坐四面御門神。大内建禮建春門等令坐之神也。本社在但波国令坐宮城門之上と見えゐれど。御門巫の祭る八座神ハ。もと丹波国を卍。御霊を分け移しゐる外卍れゆ。此神の當国ゑ鎮坐せる事ハ。彼豊宇気神の比沼麻奈井ふ鎮坐卍し縁ゑ依まることふゐべし。丹後国丹波郡ゑ大宮賣神社ありても。然ハ思ハ侫〳〵ふり。まと櫛石窓神社の在る多紀郡ゑ大賣神社と云ゲ式ゑ見えとるも。大宮賣神ふハらざるの尋べし。御社ハ寺内村と云ゑ在とぞ。ちて又式外ふきども。伊勢大御神宮ふも。此神を祭らまとめ。其ハ倭姫命世記ふ。御門神豐石窓櫛石窓神。四至神四十四前宮中祭之と見え。御鎮座傳記ゑも。御門神二座。豊石窓神櫛石窓神。とあゆ。此ハ大内と同く。必祭卍給ふべき謂ふまバ。式外ふ卍ゆて麁畧ふ思奉るべきおとふ非ず。伊勢神名祕書ゑも。御門神豊石窓神櫛石窓神坐也。四至神四十四前宮中祭之号式外社也。無宝殿也と見えて。外宮ゑも同く坐ハとし。世記ゑも。此書ゑも云へるハ。信ゑ然るべし。まと清和天皇紀貞觀元年五月ふ。山城国天照御門神ふ。從五位下を授られしおと見も。此ハ天照大御神の御門を守衛と万へる由よて。称とる御名あるべし。まと神名式ふ。越前国足羽郡。御門神社。能

登国能登郡御門主比古神社。此二社も決免て石戸別命あるべし。大和国高市郡天津石門別神社。此社も清和天皇紀ふ貞観十七年三月授大和国正五位下天石戸別神従四位下と見も。まと式ふ。摂津国嶋下郡天石門別神社。此社も今茨木村と云ふ在と帳考ふ云り。近江国伊香郡天石門別神社。陸奥国白川郡伊波止和氣神社。此社も仁明天皇紀承和十年九月奉授陸奥国勲九等。石波止和氣神従五位下と見も。神名帳頭注ふ陸奥国白川郡伊和止和介手力雄命と云るも拠ありて云るゝ例のおしなべての當きるあるゝ。まと右社ふ並て。都〻古和氣神社。名神大。仁明天皇紀ふ承和八年正月奉授陸奥国白河郡勲十等都〻古和氣神従五位下同三月授従五位上と見も。まと式ふ同郡ふ石都〻古和氣神社と云もなのも上ある都〻古和氣神社も国の一宮ふて當国の事を記せる。觀迹聞老志と云もものふ。都〻古和氣神社。關山明神乃是也。往時關山去今新宮東可二里。松杉欝欝峙于白河城外驛口。今社地在白坂奥野之疆。建両社以爲關山神といへも。関とも名ふ賀ふ白河関あり。是ふをもて按ふ。都〻古和氣神社を申ゝも。決て石戸別神あるばくおぼも。一宮記。まと神名帳頭注ふ味鉏高彦根神とせるも例の信ゞとし。ちゝも此郡ふ伊波止和氣神社なるおとハ。必關守る謂ふとる事おゝばゝきぢ。此御社おそ。一宮を坐て。關神と申ゝべきふ。然も非て。都

都古和氣神社を。一宮と申し。關山明神とさ子申ス。て。然て推量(オシハカ)らるゝ。おゞ。然まだ石都(イシト)く古和氣神社も。同神おゝ。

ゆべきおと。准子て知ゞ。し。石都く古和気と云ひ。都く古和気といふ。共ゝ石戸別ゝ訛きるゝて。此て道奥人の。唱へ誤あり〻むを。其唱へのまま。ゝ記し傳へ。さるおらむも知ゞらゞ。下ゝ挙とる。伊豆国伊波氏別命神社の処ゝ。云るゝ考ふべし。光仁天皇紀寶龜十一年十二月此處ゝ。鎮守副將軍百濟王俊哲等。賊ゝ圍(カクヘ)まし時。右の神ゝ。ちゝ祈ゞて。神力(ミタスケ)を蒙(カウ)ゞしゝ依て。幣社ゝ願(アヅカ)らむ事ゝ。請(コヒ)申しゝ。許し給へゆ。おと見も。まと東鑑ゝ。文治五年七月。白河関を越て。関明神ゝ奉幣せらきし事ゝ。其ゞ。泰衡を征(ウツ)ときのおとゝ。ゆと式ゝ。美作国英多郡天石門別神社。おゝ社て。清和天皇紀ゝ。貞觀五年五月。美作国從五位下。天石門別神。授(ヲ)從五位上(ヲ)と見も。此社て。今地早滝と云ゝ在と。帳考ふいへゆ。又式ゝ。備前国御野郡。石門別神社。當国の式社考ゝ。大供村と云ふ在と云ゞ。石門別神社。當国の式いふゝ在て。戸隠宮と称ゞゞい子り。戸隠といふて。手力男神と云古傳の存れるゝあゆべし。清和天皇紀ゝ。貞觀五年安藝国正六位上。天磐門別神ゝ。從五位下を授けられしおと。此神社いづゝゝ在ゝ。尋(ヨ)べし。同七年ゝ。太政大臣東京第。天石戸開(アケ)神ゝ。從三位を授(サ)らきし事ゝ。おど見も。おの石戸開字御戸開神の開字。アケと訓むべきこと。まと石戸別ゝて。開の意ゝ。世記ゝある由をも曉るべし。まと式ゝ。土佐国吾川郡。天石門別安国玉神社。印本玉字の下ゝ。主。天二字ゝ。今て信友ゞ校合(ケウガフ)とる古本三ッよりめ。上田百樹云。今も国玉とゝみ云て。玉主とゝいゞと云ゆ。と云もゝゞ。

此も石屋戸を開さるふ依て天も国も照明り安らゝまるおどの意を以て称さる御名ふや

はと伊豆国加茂郡伊波氏別命神社。伊豆志ふ君沢郡梅名村ふ坐に慶長九年の棟札ふ天石戸別又名櫛石窓亦神石窓此御門之神也とあり今右内明神といふ上梁文ふも賀茂郡田方莊梅名村やゆり三島大社をり迁宮を以て祠地のみ賀茂郡とにること大社の例れ如きゝと云り大社とも伊豆三島神社のあと。伊波氏別神社の三島神社ふ由ゆる事第百三十一段ふ委く云り。さて隣郡田方郡ふ劔刀石床別命神社ゆり此も同神あらむゝそも石床とも下ふ挙さる石座神社の石座と同義ふ聞やきバふり。伊豆志ふも君沢郡谷田村ふ坐て日本武尊と云ふまさ御嶽權現と云ふ。下宮とも申すし云り。さて劔刀も石の波ふの〳〵きる発辞ゝまさ是ふ就て思ふふ上ふ挙さる陸奥国ふも有べし都古和気神社の石都〳〵古も石床を訛きる訛石都

伊波久良和氣命神社。伊豆志ふ当郡八幡野村八幡宮も配祀に八幡ハ上古の神ふも。今も二宮れ已祭のとき酒を竹筒ふ盛りて伊古奈比咩

神社ふおくる礼ありと云り。伊古奈比咩神社も式ふ同郡ふ載らまさり。さて伊波久良和氣神社の彼社ゆ由あること此も第百三十一段ふ云べし。

田方郡ふ引手力命神社。伊豆志ふ賀茂郡十足村ふ手力雄山ありて社あし。をど已場と云処あり。今は坂といふをど已ふ為て祭りし処ゝゆ云已。引手力命とも石戸を引開さる由の御名ふるべし。

那賀郡ふ石倉命神社。ふ余餘国〳〵滋賀郡ふ石坐神社。若狭国遠敷郡ふ石鞍比古神社。石鞍比賣神社。並て石已越前国大野郡ふ磐座神社。能登国鳳至郡ふ石倉比古神社ふ。石鞍と作るも多〳〵同じふとあり。其も参河国刈谷石座神社を文徳天皇紀陽成天皇紀刈ふ石鞍と作るふてふる。

ふゆ有已。此国ふも。

石戸別命ふ由ゆる社の。殊ふ多〳〵まゆ。四社共ふ石戸別命ふるゆし。中ふ伊波氏別神社も上梁文ふ天石戸別と記し。引手力命神社は手力雄山と云ふゆきさらむ。

其由縁ゆる社どもも。伊豆三島神社。阿波命神社。

伊古奈比咩命、神社おゞ是おゐ。阿波命ハ石戸別命の御女なり。伊豆三島神ハ本是等の事委くハ第百三十一段ハ注ハ見よ。まと式ハ尾張国中嶋郡石刀神社、石見国那賀郡大祭天石門彦神社おゞ在ゐ。此石門彦神の鎮坐ハ郡を那賀と云を思ふ。此ハ伊豆国ハ郡の名あれば彼国と移せるハ在らじゃ。ハ大祭とハいゝある意あらむ思ひ得ば信友ハ此国ハ大其を云地名多うきゞ大祭と云意ハやと云 ○大殿祭御門祭供奉矣ハ古語拾遺ハ。殿祭門祭者元太玉命供奉之儀。齋部氏之所職也云ゝと在るハ依ゐて記せゐ。○故天宇受賣命者御巫猿女君等出祖也。ハれも拾遺ハ在りて記せり。○天石門別神。此神者御門之神也。ハた古事記ハ天石戸別神。示名謂豊石窓神。此神者御門之神也と有るハ依て記せる如ゐ。但し御門の開閉を掌り給ふ由ハ次ゝハ注ハ出を見て知るべし。○阿居太都命。天背男命。ハを亦名と定ゑる由ハ姓氏録左京神別ハ。縣犬養宿禰神魂命八世孫阿居太都命之後也と見え。此傳ハ八世孫と在るハ誤あり。多ゝハ孫とハるべきものあり。其由下ハ云を見よ。ハれハ並ばて大椋置始連、縣犬養同祖。阿居太都命之後也と云ひ。今木連神魂命五世孫阿麻乃西乎乃命之後也を云へるを。此も多ゝハ孫と有べきを五世孫とある ハた傳の誤あり。其由も下ハ云ふを見よ。まと巨椋連今木連同祖といひ。大椋巨椋多ゝ同じハとハて部弓削おゞ云類ハて大椋の複姓あり。宮部造天壁立命子。天背男命之後也。ハを云るを合考ふるハ。大椋今木宮部ハ同祖ハて天壁

立命と云るは天底立命あるおを灼く。ソコカベ同義おる由は第二段傳
は委く辨とるを見るべし。まと神宮部造合せ考ふべし。葛城猪石岡天降天破命之後也とあり。阿居太
都命天背男命同神おるおと天壁立命子天背男命とあ
ふよて著く阿居太都と申を以て天手力男命亦名天石戸別命
の亦名おゆとは知られあり。故縣犬養宿禰條は神魂命五世孫阿居太都命といひ
今木連條は神魂命五世孫阿麻乃西乎乃命と云る五世八世共に誤ふて多くは孫とあるべきものおり
るおり。其は此神大御神の刺隱坐ち〜石屋戸を開あ了
ふ功績ふ依ゆて彼新宮は御門を守護り其開闔を掌給
ひ。おの由は上の御門祭の詞を引て云る処立帰ゆ見るべし。おの因縁はとゆて御裔
は大伴氏佐伯氏御門の開闔を掌とりしうず。此事第百三十七段

天押日命の下ふ委く云を見よ。此神の御名ふかく負坐れむは然る事
おりれゆ。○犬養おは姓氏錄攝津國天神ふ多米連神魂
命五世孫。五世は三世の誤おること上は云るが如し。天比和志命之後也とあ
ふ條の次ふ犬養同神神魂命を云ふ。十九世孫田根連之後也とあ
るは依て記せゆ。さて犬養とは犬を養ひ走して獵を
爲ふ職號は姓ふおまるおふ。其は高野天皇紀天平神護元年五月の処ふ
馬養造人上祖以能養馬仕上宮大子被任馬司庚午籍編馬養造云〜とあるは准へて知るべし。○縣犬
養宿禰。此は姓氏錄左京天神了。縣犬養宿禰神魂命八世孫阿
居太都命之後也と有は依て記せり。但し八世孫とあるは誤は直は孫お
ると上ふ云りき。上ふ舉とる犬養氏の條おる。田根連は阿居太

都命の裔(スエ)ある事を上ふ引(ケ)る文ふ天語連縣犬養同祖天日鷲命之後也とあるによりて著(シル)く田根連と云(いる)る事を云ひ阿居太都命をいへる事本を舉ある処也故此姓を天日鷲命の裔として此ふ記しつ此ちて此姓を元は犬養と此み稱(イヒ)けむを御縣ふ居ゐゆし故ふ縣犬養とハ云ふらむ天武天皇紀ふ十三年縣犬養連賜(テ)姓(ヲ)曰(フ)宿禰(ト)を云ひ然まで此をゆ前ふ事連の加婆禰ふて有しゆゆ是ふ就て思へば犬養部の群主(ムラビト)とありし職号をやがて戸(カネ)とも為るゆ云ふ神亀四年十二月の処まと宝亀二年九月の処ふ此氏人のふと見ゆ合せ考べし

故天照大御神(カレアマテラスオホミカミ)出坐(イデマセル)天石屋戸(アメノイハヤド)ヲ出時(トキニ)天原(アメノハラ)及(モ)天下(アメノシタモ)自得照明(オノヅカラテリアカリテ)而(テ)八百萬神(ヤホヨロヅノカミモロモロト)俱(モニ)相見(アヒミルニ)面(オモ)皆(ミナ)明白(シルカリ)矣(キカレノシテヲ)爾伸手而(カレテウタヒマヒアヒトモニトナヘタマヒア)歌舞相與稱曰(ウタヒマヒアヒトモニトナヘタマヒア)阿波禮(ハレ)阿那(アナ)於茂志呂(オモシロ)阿那(アナ)多能志(タノシ)阿那佐(アナサ)夜憩(ヤケ)飫憩(オケ)矣(トキコ)此者(ハオホ)大

直會（ナホラヘノ）事本（コトノモトナリ）也。

自得照明而（オノヅカラ）能豆加良氐理阿加理氐（ヨクツカラテリアカリテ）と訓ばし。故（ゆえに）此（ここ）まで古事記を取きり。ちて大御神の出御（いでまし）るはやぐて禍事は直れる為る為依て。火産靈神は德も本の如く炫（かがや）く尸し如尸。第四十三段終の処ふ記せる或人（あるひと）は問ふ答さる説を合せ考ふべし。○面皆明白矣（おもみな）は。志留加理伎（しるかりき）と訓ばし。わ於ろふ遺を取き尸。明白矣は。志留加理伎と訓ばし。わ於ろふ燭（ともび）を燃（とも）して。相見と流（ながれ）だの尸は。髣髴（おぼくし）かゆし神の面輪（おもわ）の。みふ炳（ひる）く見えある由ふゆ。○伸手（のしてを）而歌舞（うたをどり）は。歡喜は餘尸ふ。神（かみ）ある皆（みな）起（たち）て舞ふ如尸。○相與稱曰（あひともに）とは。八百万神

ある諸（もろ）與（とも）ふ聲をうち舉て謠（うたふ）る由ふ尸。○阿波禮（あはれ）は。師説ふ見る物きく物ふ事ふ心の感（うごき）て出る。歎息は聲ふて。今俗ふも尸。ア、ゼ云ひ。パレゼ云是ふて。譬（たとへ）ば月花を見感て。ア、見事ふ花じゃ。ハレ（はれ）ゼい月ふ如と云是ふり。此尸。ゼパレ。と重（かさな）尸と流もの ふ尸。此を後世ふは。ある悲き事をのみ云て哀字をう書ども哀は哀ふ。阿波禮の中は一ッふこそ有ま。阿波禮は哀の心ふ限らぬふり。万葉ふ阿波禮ふ何怜ふ書（かき）ど此もふ。一方ふ於きて書るもふて。阿波禮は義理は尽（つくし）ふ尸。阿那（あな）と云ひ。阿夜（あや）といふ阿ゼ同じ。はゼ波夜（はや）とも。波母（はも）とも云（いへ）る波も。波禮（はれ）の波ゼ同じ。仁賢紀ふ。吾夫（わが）何怜矣（はれかな）此云阿我図摩播耶（あがずまはや）と見え。皇極紀ふ。咄嗟（とさ）ふ。阿夜と訓るふて知ばし。まゼ漢文ふ嗚乎（ああ）于嗟（ああ）如ぜの字を。阿ゼ訓て多し。ふの阿（あ）ゼ訓て也。同じ歎（なげき）ある。此（ここ）の歌ふ。阿波禮。阿那と重（かさ）ねて云（いへ）るも。

歎息(ナゲキ)は詞なる故なり。然はを本書に阿波礼言天晴也と学者此注によりて阿波礼の注を臆説なりとして信ずべからず。まことに後世に阿波礼は天晴の意と思ひそめかやうの処もこれあり。殊に此阿波礼と云言は歎く声にて、アはもじを葉歯などの如く唱へしあり。アとハレとの重なりたるなれば更なり。拾遺に阿波礼を言天晴也と云るは、太じき非言なれども是ふてもその加みハレを晴れ如く唱へしことを知べし。まことに俗に天晴といふ詞を、この阿波礼を誤て云なり。かくて古歌に阿波禮を詠出るを、古事記に倭建命の御歌に。

一ツ松阿波禮書紀に聖徳太子の御歌に旅人(タビト)阿波禮。此外にも思ひ妻阿波礼、また影姫阿波礼などと云る哥も同じ詠なり。是ら後世の意をもて思ふに其を阿波禮に思ふと云意に聞もまども。上古の意は然らじ。共に歎辭(ナゲキコトバ)にして。一ツ松とや旅人とやと云に同じ。倭建命の吾妻者耶と詔ひしに応じて思ひ合せて知るべし。また万葉に阿波禮とは。

此島。吾子はも阿波禮。おぞ詠るに。言ひとけみ少し異なれども。意に右に同く。この万葉の二首共に文字にいはも何怜とかけり。此二字を仁賢紀に播耶と訓にもて阿波礼も歎る辞なることを知べし。歎感じて直に。アヽハレや歎とはまた城いへにふて。此詞の本なり。阿波礼〻〻〻と波礼にのうと過しなる。あげきにのまり。阿ふ。外どの類も同じ。然るを去ばて。詞の用ひとも。世に転(ウツ)りて本に意とは違ひもくにと多き物にて。この歎息は詞も後にはさはぐに用ひて。其用ひ状に依て。意も異なるが如く聞もにもにのり。其はまに万葉十八に郭子は鳴を知〻て詠る長歌にうちなげきにのはを

の島といたぬ時おし。此を安おし後の詠方ふ似さめ。前ふひく歌ぞもの言のさと異れ卍。それ故たまづ上代の哥ふ詠る状は。一ッ松ゐたもまき旅人ゐたれ。ゐたれたまき其島。おどやうふ。其物。くふふきて。心れ感く時ふ。某あハれと歎ぜる詞ふ卍。ゐたれたまき其島とを免るを。あ〳〵其島と云むゞ如く。是も同く歎ぜる詞ふり。然ゐ流ふ此哥ふ。ゐたれたまき。ゐたれたまと歎びべき物を卍。ゐたれたまの島と詠るを。言。うさ少し変指て。あはれの島と云ふ。其後ふ至卍て。阿波禮と記ぬ。蜻蛉日記れ文ふ。関れみう。阿波礼〳〵〳〵と覚えて。もくさ紀を見や卍さきバ云く。とあ卍。此も同く。心の内ふ。古今集ふ。阿波礼てふ言ふゐまく歎ぜるふり。阿波禮てふ。とふやらじとや。春ふ後れて獨咲らむ。おを人の花ふ見て。感て。アハレと云詞を。其花れ心ふ。他れゐまされ花みをやらびして。已ひとり然いを。むと思ひてや。他れ花の皆ちりて後ふ。ひぞりおくきて咲ぬらむと詠るあり。阿波禮といふ。拾遺集ふ。おぬ人を。ふさふ待ぬ。久方の月を阿波礼といはぬ夜ぞおき。此も。阿波礼〳〵〳〵〳〵と歎ぜるふ。阿波礼

といふと云ふるふゆ。阿波禮と見卍。古今集ふ。紫の一ッもと故ふ武藏野の。草ハみゐゞら阿波礼とぞ見る。おも心ふ。阿波礼を歎じて見るふり。阿波禮とおもふ。古今集ふ。立ての卍阿波礼とぞ思ふ〳〵そふても。人ふ心をおきつゐら波。外ぞ云ふを。此も阿波礼を心ふ感じて。歎ぜる義ふ卍。

みふ其物ふ心うおきて。歎息ひるを云ふゆ。はと阿波禮を云ふ。後撰集ふ。ゐたさらを。の月と花とを同くを。阿波礼ふれらむ人ふ見せぢや。此等の外ふ。阿波禮を見ひ。阿波禮と記く。阿波禮ふ。ゐ卍云へるさをひを。都て何事ふまき。アハレを感ぜらはゝさはを名ぢを。阿波禮と云物ふして云ふるふ卍。如此く阿波禮と云ふ言は。さはゞ〳〵言うと變卍ゐれども。其意を。ゐ外同じ事ふて。見る物。きく事。ふひわざふぬきて。情

の深く感ずることを云あり。まと物をいれぶといふ
言も。もとアハレを感ぜ
る古とあり。古今集よ。霞をいたづらに有をのみ。阿波礼
と心得さまども。然ふ非ず。凡て嬉しとも。悲しとも。楽
しきも。哀しきも。恋しとも。情よ感じて。アハレと思ふ事なり。みな阿波礼あり。
ろき事をこの古紀事ぬぎをき。阿波禮と云ふ例古と多し。
此ふ神等ぬ。阿波禮。阿那淤母志呂を。歌ひあるよて知る
ばし。又物語文ぬどよ多。阿波禮ふをかしう。阿波禮ふう
まきうあぬ〜連けて云ふ。伊勢物語よ。此男。人の国に
とねもしろく吹て。吉をきうてぞ。阿波礼よ謠ひけ
る。とある。笛をおもしろく吹て。宇治ふ吉のをのきぬ
阿波礼あり。蜻蛉日記よ。おもしろく吹て。ちも。阿波礼
よ。うれしう覚ゆることと限りあし。是まと心ゆきて。嬉し
きあとよ。阿波礼と云り。但し源氏物語ぬど。其外も。物語書よ。をか

古史傳十二　○三十三

しきと阿波禮あると。反對ふして云ふ事も多し。此ぬ
總ていふを。別て云をぬ異ぬあり。總て云ふば。をかしぬ
も。阿波禮の中ふおもきるあと。右よ云ふ例如し。別ていい
ふぬ。人情ぬさはぐ〜ふ感く中ふ。をかしき事。嬉しきあ
とあをふぬ。感くこを淺し。悲しぬこと。戀ぬきあを。憂ぬ
事。苦ぬて心よ思ふり。叶ぬ苦ぢふは。感くことあをぬ
く深し。故ふそぬ深き方を取わきても。阿波禮を云あと
有ふ。俗よ。悲哀をのみ阿波礼と云も。此心ぬ例あり。譬へぬ。總て木草ぬ花ぬ
多ある中よ。櫻をと。分て花と云て。梅よも對苦ふ例如
し。源氏若菜。巻ふ。梅花を。花のさかりふあらべて見ぬや。
と云ることぬり。梅花も花あれども。其よ對へても。櫻

を取ひけて花といへり。然まだ阿波禮を云こと。情の中に一おゐゐて云に。取ひ紀ていふ末のおをゐゐ。其本を云ずで。總て人情の事ゐぬまて感くに。こゐ阿波禮ゐ。故り人情に深く感ぐべき事を。總て物に阿波禮とに云れ。物ゐ感ぐとに。俗りにあぐ善事ゐ。のみ云ゑまを。おまも然ら。字書ゐ。感動也と云て。心に心れうごくおをゐれで。善事ゐまれ。惡事ゐまま。心の動きて。アハレと思に。感ぐるゐて。アハレと云詞ゐ。をく當まる文字れ。漢文り。感鬼神と有て。古今集の眞名序ゐも。然書れとるを。假名序ゐに。おゐゐみをも。阿波禮と思に。せと書まゐるゐて。アハレに。物ゐ感ぐるこをゐゐを知べし。大凡阿波禮と云言の本。まと轉りて用ひとるやうゐど。上件ゐて心得べし。まと物のアハレと云も同じこをゐて。物と云に。言を物いふ。語ゐを物ゐとる。まと物まうで。物見。物いみゐど云類の物ゐて。ひろく。ちて抜に。物の阿波禮を知るいふときゐ添る詞ゐ。

と云ひ。知らぬと云差別に。譬へば紅で色紀花を見。さやの外る月ゐ向ひて。阿波禮と情の感く。卽こま物に阿波禮を知ゐゐゐ。おまその月花に。阿波禮ゐる趣きを。心りにまへ知る故ゐ感ぐるれり。其阿波禮れるおもむきを。辨ア知ら。入に。いうゐ紅でこま花を見ても。皎々ゐる月ゐ向ひても。感くゐとゐし。是を。れに。ち物の阿波禮を。ちら。ゐり。月花にみゐ非ず。總て世中ゐ。ちの。とある事ゐふまて。其趣き心ばを。辨へ知。て。うれしかゐば。き事に嬉く。をのしかるべき事は可笑く。悲くるべき事は悲く。戀しかゐば。き事に戀ちく。其くゐ情の感くぐ。物に阿波禮を知まるゐ。其を何とも思に。情に感かゐ。ぐ。物の阿波禮を。ちら。ゐり。ちまば物の阿波禮を知る。心ゐる人と云ひ。知らぬを。

心形き人と云ふ。西行法師の心ふき身よも阿波礼も知らぬ。此上句は常ならるべし。○今云。此も法師も。妻ぼて君親妻子をも捨て。樹下石上をさ宇ふ定まる住所とせば。清く世情を離るゝを。専と為とるもの故ふ。阿波礼を知らぬ人あり。その阿波礼知らぬ身よも。阿波礼も知らるゝと訓るれり。伊勢物語ふ。むかし。男有けり。女をとかく云ふを月日ふ。岩木よし非ず。心ぐ流しをや思ひ乃むや。

う〳〵阿波禮と思ひ乃。是ふて。物の阿波禮を知ると云ふ味を知ぢし。さて物の阿波禮を知るとゆ。歌も出來物ふ。古今集ふ。古歌献。時の目録も長哥を熟読て知るべし。神代より詠來まる。四季恋雑ものゝ哥も。悉く。一ッの物も阿波礼より出來とり。と云意を詠と。四季と恋雑との間ふ年ごとふ時ふ於け於〳〵。阿波礼てふ云を云。於〳〵。を言れと。其前後の四季恋雑の哥も。こ礼時ふつけ於〳〵出來ある哥どもあり。と云義ふて。其物の阿波礼の品〳〵を目録ふ詠とる長歌あり。心を著て読見るべし。後撰集ふ。ものゝ所よて。ぎも前ふかまれ物ゞと。し侍り。ゆを聞て。内と。女の聲よて。ものやもく。物も阿波禮も。ゞ礼る翁かあ。と云を聞て。貫之。阿波禮てふ言ふしるも。も無まど。も。言でもえこそものらぬ物ふまま。此詞書よ。ものやしく物の阿波礼ふりぬ。と云るは。貫之ふるふとを知て。哥をみ貞ふ。と云事を。おぞ。ぬいて云ゆ言ふり。返答も其意を得て。哥をみとりと。何の益もあら祢ど。物の阿波礼ふ堪ぬ時も。をまでも。ものらまぬ物ぞ。といふ下心ふり。阿波礼てふ言と詠まと。るも。彼物よ感じて。歎息ゆる詞也。土佐日記ふ。もろふしも此方も。おもふ事ふ。ゑへぬと。ものゝ。ぞ。歌をむ事を云るれどふて。知ぢし。とものゝ。此も玉の小櫛と。石上私淑言とふ言まし。を合せ見て。文を約ゑて注せるふり。

れを引哥おどのことハ、即此の神等れ。諸聲ふ歌ひ出給私淑言ふ委く見えとり。

ゑるも其よて。大御神の。久しく刺幽居るを甚く憂ひ坐て。千ぢふ心を碎き。謀ぢち給ひし如く出御して。本のぢと照明ひ。各く某くふ。面輪も炳焉く見え別ひしぢ。歡喜ふ堪ぐ起舞ひ。言はでえぢそ在られぢふ。阿く波禮ゑ歌ひ舉給ゑふこと。然有べき事ふおむ。○阿那於茂志呂。ぢを本書注ふ。古語事之甚切皆稱阿那。一本よ甚を至と作ひ。是も非この言。衆面明白也とのひ。阿那てふ言義て。此注ふ云らぐ。

るゲ如し。其を委くて。第六段ふ注ひ。阿那迩夜志の処見るべし。まと第四段。阿夜惶根神れ下をも合せ考べし。於茂志呂も。本注よ云ゑる如くおきど。

黒白と對言ふ白の意よて非ぢ。此ハ師説ふ。のざやうふ。とく分ることゑふて。とおちろしゑとのるちろしも。繁明り能れ分ふぢ。ぢと御火白く燒け。と云へふ。今云。此て古本の神楽哥次第ふ。人長の主殿寮よ令ゑる言ふ。御火白久献礼まと見も。即のざやうふ明く火を燒け。と云るあり。軍書おぎよ。矢を射拔きて。鏃の著ハき出ゑ弓を。矢ぢひ白く れど云ゑふ同じと有ひ。此て七里繁民ゲ。師説をきゲ本よ書入とひしを。其侭ちく。よ注せるふきて記しおき却る字。信友り。此段ふ師説と云る注て。これそきあり。けて齊明紀ふ。建王の薨ませる時の大御歌ふ。今城おゑ乎武例ゲ上よ雲ゑふも。旨屢俱之多く婆屢今本よ居と作ひ。今て活板ふ依きり。何の嘆の矛。万葉よも雲谷灼発。とと発る哥ふり。此御歌の旨屢俱。やゲて此の志

呂と同じく。伊知自流斯の志流ふて。灼(ヤケ)た由ふれど。於母(オモ)志留(シル)を有ばきを。志呂(シロ)とゐるた。後れとふ可れ儘ふ記し傳へとるゝ。本と已志留をも志呂をも言へ爲ふや。まと此の志呂た黒白の白れ意ふハ何ら祢ど。黒白れ白も本た同言ふるべくおそ。まと同紀ふ。同(レ)王を葬(カクレ)奉きる。今城の地を詠ませる大御歌ふ。山踰(コエ)て海わと流とも於母(オモ)之樓(シロ)枳(キ)。今城の内たわれ飛ゆまじよ。とゐる於母之樓た。此の於茂志呂と全(アタカ)同言ふるを。前の御歌ふ。雲だふも灼(ヤケル)し立(タ)ゝ。と詠ませ流と合せ按(オモ)ふふ。雲れ立ツを御覽(ハ)ふて。御子を偲(シヌ)び給ふ御心を。慰(ナグサ)免給ふ由ふて。後世ふお安ふろしと云流ふ似とるた。此の於茂志呂を。漸(ヤヤ)ふかく

も活用(カ)ゐる可已れゆ。師說ふ。此於母之樓枳今城のうちは。の御哥を引て。悲き事ふ。おもふろと詠給へり。さきば。此言た。心の深くふむ意ふて。哀樂ふの〳〵たらば言ゲ。古意ふりとて。本書ふ面明白也と云る注を。俗意ふりと言きし由。右ふ云る書入ふ見えとき。ど。廣成主の心も。黒白の白れ意ふた非ず。故本文ふも注ふも。多く白とた書ば。明字を添て書きとり。然るを師た。本ふ明白ふ。シロシと假名字付とるをれみ。心ゝ留らきふふや。此た後人の已ざふるをや。○清濁考ふ。オモシロシとた。心ゝ挂るやうの事ふりと何已。今云。ふの大御哥の於母之樓枳た。オモシルキと訓べきゝとも思へど。も。万葉十四ふ。於毛思路伎をあるふ依て。シロと訓り。ち

て此た。今まで常闇ふして。燭(トモシビ)を燃(トモ)しとるだかりふてた。猶(ナホ)おゝ〳〵ふく。分難(ワカ)かれし神等れ面の。大御神の出御と共ふ。明白(イチシル)く見えゐるゝ。各〳〵相見て。おゝえば阿那面(アナオモ)明白(シル)と。歌ひ給へゐ事とぞ思ハる〳〵。今世ふも思ふえば。免ぢらしき物を見

とる時おどる。於夜云々と言ひ出ることと有るに。此心ぞ
有り。前に阿那と阿夜を同言にて。驚きて嘆く色あり。
かくて俗に驚の色を。於夜といふ言のごとくに。
即是ありと云るを。此に思ひ合せて辨ふべし。○阿那多
能志。古も本書注に。言伸手而舞。今指樂事謂多能志。此意
也と。ごとの言に義に。信に如此くあらむか。但し多能志に。
多怒志を有べき古言に格あるを。能とごとるに。後の言習
の儘に記し傳へ。多るか。万葉に多怒志をごとの。まと古能と云べき
を。怒と云ること多かきぞ。古くは能
志をも怒志をも。二ぢに云るわや。万葉緯に舉ある。内
侍所御神樂式に採物の篠歌に。篠乃葉爾雪布理川毛留
冬乃夜爾豊乃安曾比乎須留我手伸左。と樂に手伸と書
るに。とも。由あるとおぼゆ。さきど師に。多能志を手伸の
義とおる本書注に。附會に

て甚俗意ありと言まし。とぞ。此に然も有むか。ちきど。
餘に思ひ得さる説のあれば。姑く本書の注に從ひて
あるに。ちて憂ふる事に有て。自然に體に屈みて。伸やう
ならぬさま。ちに体を。結滞ある心もとけ。其憂のとみに
晴て。その歡喜に堪ずて。阿々波禮をうとひ。其情の感
く餘ふに。手を伸て舞ふこを。おきまと自然に眞情に。
阿那多能志をに。さまで屈みあるし手も。伸やうに
れる由あるぞし。斯て多能志に。もを其立舞ふ狀を云る
體語ならば。後に麻美牟の辭を添て。多能志美。多能志
牟。多能志麻牟。と活用しある体に。多能志美と云に。其用
語のまと體語をあるをらむか。かく本の体語を用語
に活用ひ。それ用語を

まと躰語ふしとる語ども甚多ゝ也。此言の義おゝ熟考ふべし。○阿那佐夜憇。古信友本ふ書入ある。長谷川菅緒と云人の説ゝ。本註ふ。竹葉之聲也と云るゝ非説ふ也。佐夜憇ゝ肥前風土記ふ。分明謂佐夜氣志とあふ是分明字ゝ意ふて。明ふる意ふ也。天照大御神の。岩屋戸ゝ出給ひて。世間のさやかふ明けく成きる由ふ也。と云る此説信ふ然る事ふて。阿那と云ふ發語ゝ依ふても明ゝ意とゝ知らきゝ。然るを師ゝ記傳ふも。右の聞書ふも。竹葉のそゝぎて。さやさやゝ云ることふり。篠ゝ葉もゝ山もさやふふど。古ゝ用ひ來れぞも。発語の阿那きふえぐ。神楽。吉ふ。サアくくサヽ。昔ハ神楽ゝとき言しふりと言れしゝ。佐夜祁。佐夜加ふどゝ。哥ふも詠ことふ。いのまして心著れざりし。かくて発語の阿那きふえ安。と言きしは疑ふべき

注を信じて。疑ふまじき古語を。疑ゝきとるふぞゝのりゝる。ちて阿那於茂志呂ゝ。神等ゝ御面ゝ。炳焉く見えふ依を歡べる詞。ふの阿那佐夜憇ゝ。世間の分明ふふれる事喜ぶるふきゞ。共ふ明ふる由ふゝあきど。彼ゝ神等の面を云ひ。此は廣く世間ふの〳〵る詞ふ也〳〵也。○飫憇ゝ。まゝ師云。古語拾遺ふ。以飫憇木葉爲手草と有て。飫憇振其葉之調也。と云るふと疑はし。神樂歌古本ふ。於介と唱るふとゝ。處〳〵ふ見えふきゞ。此言ゝ古傳ふるぶし。然れぞも此を木名とせるゝ心得安。ちる木ゝ。古も今もいはゞ聞安。或説ふ。賢木ふりとも。檜ふ也とも云へど。これ推量りの妄説ふて。其證ふし。又木葉を振音のオケを鳴べき謂ふし。ち

まぞ此を木名とするなり。凡て同処に云る阿波礼佐くと已紛れ易る非説なるべし。

こゝに古言の意に非ざるやゝ後人の附會れるを辨へ弊なて記せる物なり。○今云此師説れ中に阿波礼注を非と云れたる事なるべし。然るに茂志呂多能志の注に然も有まじき由なり。上に云り。

故思ふ。於介とは。上に見えたる汗氣の

おゝを。神樂ふかく唱へしを。木名を誤まるなるべし。佐夜

憩ふ竹葉之音也と云るなり。さやゝと鳴

ふ声を已出なる言なれば。ちも有ばし。

オケ。オケヤ。アハレ。ハレ。ソヨヤ。ソヨ。サ。サ

ヤ。あど云言も見也。あわとく考ふべし。

○後按ふ。神樂

譜ふ。その舞を本末ふて稱美る詞ふ。阿知女於介。阿知女

於介と云ふ説。舊説に。阿知女は。宇受賣と云こゝをあわと

説るは。然る言なまぞ。於介てふ詞を説得ざるを。伴信友

ぐ考へ。古事記ふ。意祁都命とあるを。日本紀ふ。姥津命と

あるは。伊呂波字類抄に。獲をオケザルと訓なるを思ふふ。

阿知女は。宇受賣と云言ふて。宇受賣獲を云て。稱美なる

詞なるぐ。宇受賣於介を云ひては。埋置けと云ふ如く

聞なる故ふ。阿知女と云替とはあらむを云り。此説然は

ばし。

敎子なる。越後国人樋口英哲云く。我ぐ越後ふて風俗歌うなひて。舞踊りなどはるを。ヂンクヲドリと云は。此は隣国ふも有りて。誰もとく知まる事なり。然るふ其上手なるを称て。オケ。サと云は。其は我ぐ郷のをむ。柏崎なまバ。柏崎オケサといひ。三條なるは。三條オケサ。新潟なるをは。新潟オケサを云は。其風情は。少々異なるは。意は同じ。かくて此オケサと云ふこを。甚いぶかしく。人ふ問ふに。誰も其言義を知まぬ者なし。然るを今師説を承賜はる。彼踊まる状の。いを可笑く宮風とはぐ。宇受賣命の御有状に似とり。と美

る言れりとて。始めて思ひ得侍り畏と云
ふ。これ信ふ古言の遺きゐるばし。○大直會は。大
直り饗ふるばし。然ゐは是時。大御神の隱坐て。世中常闇
きゐきゐふ依て。神等の愁惑ひれむ事を。上ふ云へるグ
如く別為を。今かく出坐て。世中再び明らけく。愛とく成
為きぞ。神く手を伸を歌ひ舞ひ。悅合ひ給ひれむ事も。上
ふ云ふるグ如し。世中直ぴて明られく。本の如く成畏る
を。大ゐ事の極みゐれぞ。神等互ふ悅び給ひて。大御神
此大御前ふ。殊さらふ。種く此物奉ぴ。各く自らも。祝ひ給
ふるゐ依ゐれきば。宴よも。大直ぴ饗と云ばきゐぴ。此を例と
志て。大御神の大宮ハ更ふも申さば。何処ふ於ても。神事
う依むしく仕へ奉り竟さらむ後ふ。其献物ゐど下し

賜ハぴ。誰も〳〵悅び
の酒宴ゐど為るを。直
會と云ふ。此時の大
御古事ふ效へ依ゐぴ。

於是八百萬神共議而。於速須
佐之男命。科千座置戸出祓具。
令拔髮須及手足爪而。以手
爪爲手端吉棄物。以足爪爲足

端凶棄物而。以唾爲白和幣。以
涕爲青和幣。乃使天兒屋根命。
宣其解除出太諄辭而。割天小
菅拂而。令祓竟。八百萬神等。嘖
速須佐出男命而。汝所行甚惡
也。故勿住天上。亦勿住葦原中
国。宜急適底根国云而。乃共神
逐逐降矣。世人慎收己凡者。此
其緣也。

共議而。師說。おもも天照大御神。はゝ高皇產靈神の
命を受て爲る。非ず。神とち集て議ひ給ふおひ。其て淡き

所以ぞ有々む。書紀、古語拾遺ともどの旨も同じ。をのまぢ。解除の事を爲
給はゞをさた。産靈神は大御心を以て出給らむ。其由下ふ云
を見て辨ふばし。○科千座置戸之祓具古事記ふた。あゞ
ひ、書紀本書、古語拾遺も同じゝまど、言足らぬ故、今ハ書
紀第二一書ふ責其祓具とあるふ依て、祓具、字を補ふ給
科字は、書紀ふ従まひ。師説ふ凡そ波良比ふ二ツの中。其一ツは。伊邪那
岐大神の。阿波岐原ぢ禊祓ひ如し。一ツは此の解除ひ如し。
是罪犯ある人ふ科せて。物を出ス贖ひるふひ。かゝまぢ。
其事も意も。二ツ別ふるふ似ふれど。本は一ツ別り。履中紀ふ。
車持君ふ罪有て。負惡解除。善解除而。出於長渚崎令祓禊
とあるを以見まぢ。犯ある者の波良比も。水邊ふ出て禊

祓ける。是罪犯も穢も同じゝまぢ別り。大祓詞ふ。伴男能
八十伴男乎始氐。官々ふ仕奉留人等乃。過犯家牟雜々罪
乎。今年六月晦之大祓爾。祓給清給云々。速川能瀬坐須瀬
織津比咩止云神。大海原爾持出奈武云々。四国卜部等。大
川道爾持退出氐。祓却止宣。此文を思ふばし。罪犯を解除
ふも。穢汚を清むる禊と全同じ。穢は即罪ふり。罪は即穢
の段ふ云ると。併考べし。まと穢多も通はして。罪とは
云るふと。仲哀巻国之大祓の所ふ。委くいふべし。けて
罪ふ穢ふも。其重き輕さふ隨て。同く波良閉
ひ始めた。上代の法ふ。然るを漢国の制をれみ。專ふあらひ
用らふ。世ふ下りて。上代のれらし。何事もかはりて。此の波良閉の
法も。廃まもきおるれ。然たふまど。中昔までも神事

ホ付あるホをホた。猶此法を用ひらきて。大上中下品く
れ祓ホのヒしこを。古書どもホ見も。そは仲哀巻。国之大祓
れ処ホ。委くいふばし。
けて其祓具を出さちむる事た。今考るよ。二ッ義ホのヒ。一ッホ
た。其祓ホ用ふる色くれ物を科せて。出さしむるホめ。祓具
と書きとる。具字を思ふばし。まあ以唾爲白和幣。云くとあはも。祓ホ用
ゐ物ホ取きヒ。はと雄畧巻ホ。齒田根命罪ホのヒて。以馬八
匹。大刀八口。祓除罪過とホのヒ。馬大刀を祓ホ用ることた。大祓詞ホ。高天原ホ耳振立
聞物止。馬牽立氏を見も。抑馬を用る所以た。耳振立聞物止と有
古書どもホ見也。神祇令ホも。上祓刀とホのめ。此外
如く。神とちの。其祓を速ホ聞召受よと云意ホ。上
文ホ云く。撥別氏所聞食武とホのるを合せて知らはも。此ホ
准へて思ふよ。太刀た。罪穢を断絶意ホ用るホや。此外用ホ
る種くの物も。其名まとハ其形ホのはひた。その物れ用ホ

どよ就て。意を取
こと多ゥるばし。まと延暦九年五月の大政官符後紀類聚三代
格。令集解ホ
どよ出ホ。ホ。定准犯科祓例事。一ッ大祓料物九八種云く。
一ッ上祓料物九六種云く。一ッ中祓料物九二種云く。一ッ下祓
料物九二種云くとホのる。その種くの物ニホ祓の料物ホて。
罪穢の重軽よはゥせて。其ゥ品ホるを以て。思ひ定む
ばし。今云。此事ホ大祓詞再釈ホ。委く注を併せ考べし。一ッホた。彼阿波岐原の禊
祓の時よ。御身ホ著ゐる物等を。盡く投棄給へめし如く
ホ。罪犯ホのる者も。身れ穢とはホまぢ。其身ホ所有物も。皆
穢ゐはを。拂ひ棄る意ホて出ゥ外ヒ。故後世まで。祓ホ
用る種くの物た。終よみホ水よ流し却外ヒ。ホホ下よ云べ
し。かくまぢ祓

具を科にる。もと右の二の意ある。異国の贖刑と一の意より説成は。最も古意より非ず。孝徳紀に。有被役之民。路頭炊飯。於是路頭之家。乃謂之曰。何故任情炊飯余路。強使祓除。復有百姓就他借甑炊飯。其甑觸物而覆。於是甑主乃使祓除。如是等類。愚俗所染。今悉除断。勿使復為。こゝ。世く多。其祓物を取て。已が利ふせし事と聞ゆ。そもそも。本意を失へる。民間のあらもしふ。有々年。○今云。国々ふて為来れる中ふ。自らふ祓法ふ叶ふる事の有るもを。をり〳〵聞及べる事ふ。其も上代の。千座も。私記ふ。風れ流も傳もて。遺もるふぞ有ふべき。

座者是置物之名也。と見えて。其祓物を居置物をいふ。窮ふて。何ふてもなるぞし。人の座處を久良韋と云も。同意ふ。故書紀ふも位字を書。千も其數ふ。犯の重さ輕ちの任ふ。祓も重き輕ち有て。祓具も多ち少き品なるを。此も極ち重けきぞ。極ふ多きを千とも云ふ。後世ふ。四座置。八座置ふど云。名目も遺もるを以て見れぞ。幾座と云て。祓のふを定しふり。置も。其物を持出て。祓にる處ふ置く意を。

ア云ふ。ア。万葉ふ。置幣とも。奴佐於伎とも見え。大祓詞ふ。大中臣天津金木乎。本打切末打断。氏。千座置座爾置足波志氏。となア。師説ふ。金木と書るも借字ふて。是も祓物を置べき置座ふ作ふ料の楷を云ふり。此金木を。置座ふ置ふと聞ゆ。ぞも。然うも非ず。文意は。金木を本末切て。千座置座ふ造て。置足はしと云ふ。ゆ。今思ふふ。此説まふゆ。をとし。置べき種〻物をぞ。畧て云もば。其置座をのみ云ること。此と同じ。一説ふ。金木を刑具と去るも。甚誤ふア。○今云。世ふいやちむ金木で目を抜く。ゆ云諺なり。此も大ふ。ふ物ふも。心ゆきぞ。過つ事もれふ。ち。金木やうの少き物をぞ。畀ち。て心せざる故ふ。目をにくことあア。と云へるふきバ。加茂翁の。金木も。置座ふ造る料の楷を云ゆ。いはれしも。信ふさる説ふて。楷やうの木を。金木と云ふ。古言れ。さ乃〳〵諺ふ遺もふふ。ふ。ふ。天野信景云。中臣の祝詞。天つのふ木と有を。ふ。ふ。ト部家さ乃〳〵附會して。本を忘もる事なり。度會延

佳瑞穂抄ニ其字をハ〜ちを侍ふ濃州のきおり山入金木取と云るを何ぞと思ひだにおり中臣祓れ本義ニくもし誠に神代の言葉鄙ふ残り侍る事是ふて知ラを侍ふと云ひ

臨時祭式ふ凡祈年月次神今食新嘗等祭料置座木とゐふた置座ニ造る料の木をいふ

これ神ふ供奉らふ〜料ふり さて置座木を今本ニクラヲオクキと訓ふた誤ふり篤胤云同書ふ楮棚四脚各高四尺長三尺五寸ともあひ

ちて其置座ふ四座置八座置と云品ゐひ木工寮式ふ四座置八座置以木爲之長者二尺四寸短者一尺二寸各以八枝爲束名稱八座置長短各以四枝爲束名稱四座置と見も

四時祭式斎宮式大嘗祭式ふどニも祭料物の中ふ此名見也

今考ふ置座をた祓物を居置く座ふる故の名ゥて四座置八座置も本ハ四座の置物八座の置物と云ふ

ゆふて其置座の数以て云ふるふきだ一種れ物の名ふ非ず

然るをや〜後ふふひてた其名のみ古ふて物れさ乃た変ぎりと見も其故ハ式ニ諸祭れ中ニ載るを見るふ他の雑ぐれ物を居置き料とた見えば別ニ一種れ物と見えまと右ニ引る木工寮式ニ云るも物を居置べき物れ狀ニ非ず然きば延喜の頃れハ象ぐのりふりれひ置座も木工式ふ云る如くふ小木を連ふて結造る物ふ比べし今世ニ安ゐ柳筥ふどのさ乃ふても推度らる然きだ後世のもかれ置座ニ造るき木を束ふてやゲて其を置座と称ひ其木の数を以て彼座の数ニ加へて四座置八座置をた云ふゆれひ又むかれ祓れ詞ふ天津金木乎云くとゐふも後世の象ぐかひの置座を造るふとゐとも思たるきど ふは然ふは非じ彼全文たや〜後ニ定ふる物ふの詞たを外古のを用ひさきだ外ひ

ゆふひちて千座置之祓具と云て有ぎき字置戸とも云をした末思ひ得ず

師ハ應神天皇巻ふ伊豆志袁登賣神を兄弟の男れをだひれる事を云る段ふ詛戸と云る言を引て此

て其、詛事ゑ用ひあるる種く物を指て、詛戸を云へれど、此も置座ゑ置く祓具を指て、戸とて云あり、然きど、千座の置物と云むが如し、と言きゑきぞ、いのぐ有らむ、祓具て、書紀ゑ、此云波羅閉都母能と訓ゐ。○髪須、記ゑて切髪と有て、髪のおとおく、書紀まさ拾遺ゑて、抜髪と有て、鬚けこをおし、今て彼此合せて取きるゑ。和名抄ゑ、野王案髪、和名加美、首上長毛也。ゆと説文云、髭、口上鬚也、鬚髯、頤下毛也、髭、和名加美豆比介、鬚髯、和名之毛豆比介、をのきど、此て口ゑ上下の差別おく、ゑぐ比宜ゑ。鐵胤云、須て説文ゑ、面毛也、とゐゆて、口上頤下頬ゑ、どの差別おく、總ての比介を云字ゑきど、此ゑ應へ。○及手足之爪、於是とり是まで、記を本ゑと、書紀を取て文を補へり、師云、及字は、乎毋と訓ぢし、爪、和名抄ゑ、四聲字苑云、爪手足指上甲。

和名豆女を有。○以手爪爲手端吉棄物、以足爪爲足端凶棄物、ゑて書紀、一書ゑ、以手爪為吉爪棄物、以足爪為凶棄物、足端凶棄物、をゐる、といひ、又一書ゑ、責其祓具、是以有手端吉とを併せて文を成せ。書紀ゑ、手端吉棄、此云多那須衛能余之岐羅毗、とゐゆ、手端吉棄をのみ註て、足端凶棄を言ざるて、准へて知らるきぞあり、けて師説ゑ、おけ吉凶棄物は、いとも依善惡祓除の事て本ゑ。然きども善惡祓の事て、其儀を記せ依物ゑれきど、如何れるを善、いゐゑ依を惡とも知ぐとし、吉招福、凶禳禍也、と云ふ、後人の例て推當の誤あり、若さらば、上ゑ引る車持君の善惡祓除て、いゐゑ解べきぞ、犯ある人の為ゑ、福を招くおと有べきかは右ゑ引る、延暦廿年て官符て中ゑも、承前神事有犯科祓贖罪、善惡二祓重科一人云くと、ゐるも、車持君て事ゑ同じ、けてかく手足の爪を抜るも、祓具ゑきぞ。

上より云る二意を以て解べし。一ツは此祓は。極て重き祓ある故ふ。祓物も極て多く。千座を徵はおきバ。須佐之男命の所有ふ物は限りを取ても。猶足ざる故ふ。其御身ふ生ある髮須爪までを取て。祓の料物ふ用る例ぞ。書紀に亦以唾為白和幣以涕為青和幣とも。何ふよて。祓料ふるを知ぬし。一ツふハ。所有ふ物も穢きまゞ。拂ひ棄ふ意例ふの。輕き犯は穢淺き故ふ少は物を出し棄て清まる歟。是は犯重くして。極て深き穢ふきゞ。所有る物をみふのら棄ても。ふを清まりはてざる故ふ。其御身ふ生ふ物までを。拂ひ棄て清むふおゆ。ぢきバ棄る物は。みな穢垢ある故ふ。伎羅毘物といひ。棄物と書まるふも。此意ふ。後世ふ。人形を造て流にも。穢と身體をゞ。きれのら棄て。清むふ替る意例ぞ。（ゝきゞ。此須を切り爪を拔事は。右二ツ意ふるを。纂疏ふ。肉刑之始也とれさまひて。皆人も刑と心得るハ違へり。刑とは其義異ふるをや。）

ふのぞ。此師說を本として。今考るふ。手端物。足端物とは。古語拾遺崇神天皇の御世の事記せる処ふ。手末之調をふおゆの有て。此を手ふて造きふ物を云ぞと聞ゆふを思ふふ。手足を勞ふて造れる物のおゆを歟。古の雅言ふ。かく分け云へるふて。其は身ふのら手足を勞ふて造きる物は。殊ふ惜み思ふおゆをふるを。其ふら祓物ふ出して。清まはると云義ふて。手端吉棄物。足端凶棄物と云ふは。ふのらじか。手ふ吉といひ。足ふ凶ゆ

云るた手ハあふとく足た卑き物故よこのく言るのみふて餘よ涙き意た有まじくおおや其た男神れうとを足名推女神の方を手名推と云て男神ふいやしき方を負せとるをも思ふべし。ちて須佐之男命れ所有る物を盡ふ。祓具ふ出さし免ぬまぢ。ふを手末足末の物代として。其爪を拔て出きたる由れふ可し。下文れ以唾為白和幣云くとふるを以ても然た思れれとり。ちて後ふ善祓惡祓とい ふを。車持君ふ科せあるる趣た。此の吉棄物。凶棄物ふ由ふゆげふ聞もまぢも。延曆官符ふ善惡二祓重科一人とあふを合せ思ふよ。此た事趣異ふゆげふ聞えとれ。ふを熟考ふぢし。○以唾爲白和幣以涙爲青和幣。ふた書紀石屋戸段第二の一書を取まり。和名抄ふ。切韻云。唾口中津也。和名豆波岐。まと同抄よ。字書云。涙鼻液也。和名須く波奈とふれ。唾た白く。涙たや〜青けまバ。かく言ふふるぢし。きて爲とは。白和幣。青和幣の代を爲とふ由れ。是まと所有る物の限を取てもふを足ざる故れふと。○乃使天兒屋根命宣其解除之大諄辭而を。此其緣也。と云まてた書紀石屋戸段第三の一書を取まり。其中ふ割拂天小菅を云ふやた。神樂歌を取まれ。其由其処ふいふぢし。○宣解除之太諄辭とは。上ふ云ふ如く。此時の禍事た須佐之男命れ御荒を起きるふふを。其を悉く。豫母都国牙掃却らむふとを祓戸神とちふ祈白せる諄辭ふゆ。其由下よ委く云を見て知ぢし。○割天小菅拂而た。神樂酒

殿歌ふ。也戸久毛能奈可奈留久毛乃奈加止三能安万乃古須介乎佐支波良比。以乃利之古止波。計不乃比能多女。とのゐたて。正ふ此時兒屋命の菅もて祓し給る由を詠るふて。然る古傳の有しふ本紀々ゐるおを炳し。故おの歌詞は傳よ依て。文を成せ巳。大祓詞ふ。天津宮事以氏。大中臣云く。天津菅曽乎。本苅斷。末苅切氏。八針爾取辟氏。天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。と見え。万葉三卷長哥ふ。あふ手次のひふふ懸て。天よ在る左佐羅能小野之七相菅。手ふ取持て比さかとは。天川原ふ出立て。潔身てましを。まと十五ふ。それ佐保川よ石ふ生ゐ。菅根取而おぬぬぐさ。解除てまし我。ゆのと。祝詞考よ。此歌どもを引て。古の祓ふて。割ある菅を手ふ取持て。塵ふぞを拂ふが如きとざをせし外と。然るに古書どもふ。祓物くちく載ある中ふ。菅ハ見え。祓柱は。圀の郡領以下。戸くより出し物ふ人有べくきと。祓柱は。圀の郡領以下。戸くより出し物ふと。まと式よ。大祓よ用ふる物どもをバ。皆挙て。祝詞料の布。短帖までも見えとゐよ。詞を書く紙筆をのせざるが如く。菅は祓奉仕る官人。一人の手よとる物ふて。斎て作る物よもゐまバ。其人のみ祓ふらふ故ふ。挙ざゐれり。と解きしは然ゐ説よて。後までも菅を持て拂ひしおを疑ふく。其は天上ふて此時爲ゐ故實を用ふゐるとけり。師説よ。須宜。須賀と云名は。此草もとをり清浄きをし有て負るうさる故ふ祓よも用るふや。又は清と言れ通ふ故ういおきふまれ。清を意ふ取て用ふゐりをゐと。ちて小菅と云る小は。例の稱言よて。笠ふもぬふ〆

比菅ふ卍。万葉十五、哥ふ菅根とゐるも、多〳〵菅ふて、根も、木根、石根、島根あゞ云根ゞ同く、添ていふ言れり。此を祝詞考よ、菅の根と訓きしい非ぬり、まと或人ハ、菅を根ふゞら取れるゞ云ゝゞ云り。おも猶考べし。ちて、同三、巻ふ七相菅とゐゐ名義も、いまゞ思ひ得ゞ、若くも七節ゝ、まと十ふの菅こも、七ふ三ふおゞとゐるも、編目ゞ云と聞ゆきバ、此とも異あるゝ、但しまと、七ふよも編べき、長高きよ、比菅と云ゐ〳〵ろゝ、割拂とも、割て拂ふくしふ卍。大祓詞ふ。菅曾と云るも。其割とる上比名れり。其由も、神武天皇、巻、大祓詞の処ふ委く云べし。○祓意とは。祓きは免盡云。科千座置戸之祓具と云とり。逐降矣まで。凡て祓竟るゞ卍れ卍。○嘖も。迫ゞ同く。彼天津罪比積を。言迫るくしふて。下ふ。武甕槌之男神の。建御名方命ゞ。諏方海ふ迫到ふゞゐる迫も。即是ふて。此も言遁るぢき言れく言

迫免ある由ふれむ。須佐之男命も。遁るぢき辭ふく窮卍畏り給ひれむこと。天上ふ勿住ゞ。葦原中国よも勿住ゞと。諸神の迫言ゞはよ〳〵。逐ハき給ふふふて知ぢし。師云。凡て世年留も狭むるふ卍。世麻留も狭むるふて。自と佗ゞを云。差のみれり。可畏比申し過ふ似ある。ども。此神もし。かく理ふ窮卍給ゞば。彼御稜威を震ひ給ゞむふも。いゝよゆ〳〵ふき禍事の出來ふまし。諸神の言理よ服ひ。其非ゞ悔坐して。下津国よ往坐ふも。其御心比直く坐まに比ふと。想察奉ふぢし。ふふ此神の。其心比ふど。可畏〳〵ゞと。次段非を悔坐し御段よ云を見て思ひ辨べし。○惡也も。ふも本よ。無賴とゐゐゲナレ。はゞコノモレゲナレ。ふど訓きど。漢文の無賴を。ゐふぐちふ訓ると聞えて。古言ともおぞえ処訓ざま故

ふ。今は意を得て、文を改め於阿志加理と訓べし。安外は悪く在といふ義なり。○底根国を云。即下津国。夜見国のおもなる由は。上ふ既に注り。第十二段、第十八段なども見るべし。○神逐く降矣は。神夜良比夜良比降志伎を訓べし。此は古事記に、神夜良比尔夜良比賜也、とあるふ依て訓り書紀に、逐之此云波羅賦、とあるは波字は、師言の如く夜の写誤なるべし。神なり。凡て神は上の事ふ多く附云詞ふて。上ふ見も。第十段見べし。夜良布は。師説に。本夜流を延と言なり。良布ハ流良比は理と切る。さまバ用は意は。聊異なるふ似なり。ぢてかく疊て云例は。神集く神祝く神議く神問く神和く神掃くなどは如し。皆上は體語。下は用語なり。今云まと中ふ尔てふ辞を加ても云り。其は神夜良比尔夜良比岐ともあり。伊

都之知和伎尔知和伎氏おども、此格の言なり。

ぢて逐は。今俗ふ云追放なりを。ぢて後は大祓神事は。即此時は故實の隨ふ行ひ給ふ事なるなとは。今ちら言はでは。其は皇美麻命の天降坐ける。天御祖命は。此の天津宮事はまふ行ふと。御言依し坐るふて。罪穢乃清まはなとは。伊邪那岐大御神の禊祓給へは時ふ生坐る。祓戸神等の。持失ひ給ふふなむ有はは其は彼神事は。諸ふ宣聞せ給ふ詞ふ。高天原爾神留坐皇親神漏岐神魯美乃命以氐云く。皇御孫之命波豐葦原乃水穂之国乎安国止平久所知食止事依奉伎云く。如此依左志奉志四方之国中登大倭日高見

之国乎。安国止定奉氐云〻。平氣久所知食武国中爾。成出武天之益人等我云〻。許〻太久乃罪出武。如此出波。以上の文意は高天原ゐ神留坐に天津御祖命の皇御孫命を葦原中国を安国と所知食せと御事依し降給へるまゐ〳〵大倭国を四方の国中は安国ぞ定奉て坐奉ゐを其天降し賜ふ時ゐ安国と所知食さむ国中ゐ成出る天之益人等の過犯に罪の許〻太久出ゐむ方ゐ出さらむゐハ云云せをと詔へゆをいふ意ゐて此は天御祖神は御言依しを本ゐして神武天皇御世ゐ當時の事実を合せて天種子命の綴成る詞ゐり次〻れ詞も方ゐ巳文法り淡く心を著て思ひ辨ふべし祝詞考後釈ともゐ此義を思ひ洩さをと巳此委き謂由まと此詞は種子命の綴成る詞ゐることの論ひは神武天皇巻ゐ此詞を本文と為ゐを む彼処ゐ委く云べし瑞穂抄ゐ大祓詞ハ天種子命の作と云ふ傳あれむ云〻。ぞ云るは然る説ゐ巳。天津宮事以氐。大中臣天津金木乎。本打切。末打断氐。千座置座爾置足波志氐。天津菅曽乎。本苅断末苅切氐。八針爾取辟氐。天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。此一節は解除去べき式法を誨賜へる御言ゐて文意は上件の如き許〻太久の罪出さらむゐは天津宮ゐて事始まを〻祓事の例れまゐ〳〵行ひて大中臣其事を犯巳天津金木は本末打切て千座の置座を造り其座ごとゐ祓物を置足はして天津菅は本末苅断ち八針ゐ取割きそを以て拂ひ天津祝詞乃太祝詞言を以て祈白せとあゆ其は専と祓戸神等ゐ言告る祝詞ゐる。此ゐ漏さるこぞ下ゐ委く論ふを見て知べし。如此乃良波。天津神波云〻。国津神波云〻。所聞食武。如此所聞食氐波。皇御孫命乃朝廷乎始氐。四方国爾波。罪止云布罪波不在止云〻。高山之末短山之末與理。佐久那太理爾。落多支都。速川能瀬坐瀬織津比咩止云神。大海原爾持出奈武。如此持出往波。荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百

會爾座速秋都比咩止云神。持可〻呑氏牟。如此可〻呑氏波氣吹戸爾坐氣吹戸主止云神。根国底国爾氣吹放氐牟。如此氣吹放氐波根国底国爾坐速佐須良比咩止云神。持佐須良比失氐牟。如此乃良波と云るなり。失氐牟と云るまでハ上件事依し給へる祓事を天津神国津神の所聞食し受給ひて祓戸神とちの本ふ返し却り給ふ事状までを諭給へるれめ。とゐる文比ぢぐきを熟讀み熟味ひて。大祓の神事ゐ本天御祖命の御依しゐまふ〻〻行給ふ御事ふて。罪穢ゐ清まはゐ之ゐ。祓戸神とちゐ。持失ひ給ふとを思ひ辨ふぢし。大祓詞ある瀬織津比咩ゐ。即禍津日神速秋津比咩ゐ。即伊豆能賣神。気吹戸主ハ。即直毘神ふ坐ゐこと。上第九四段ふ見えとるがごとし。ちて祓戸神四柱の中ふ瀬織津比咩。氣吹戸主は。禍津日神。直毘神の亦名とゐ申せども。上九四段よも云はふ如く。其本體ゐ。大御神と。須佐之男命ふ屬て。天上と夜見とふ分ゐ坐ぢ。祓戸ふ坐して。罪穢を失ひ給ぬゐ之はまゝ其幸魂の活用ふ坐まゐ故ふ。此亦名ゐ。實は祓戸ふて。功をおし給ふ御靈を申ゑ御名ふふむ有れはふ故大祓詞ふ。此御名を挙とるれり。ちて此時ゐ禍事ゐ。禍津日神の。穢を惡み給ふ御荒びゑゐ。起ぢはふるを。祓事ふゑゐて。須佐之男命ゐ。諸神の嘖ふ服ひ坐しゐ。やゞて禍津日神ゐ。御心の和み坐るふて。是即かゐ祓物ふ負せて。流し却る罪穢を。ゐ於此神ゐ受取ゐ乃ふ理れめ。其ゐ禍事を起ゐと。滅ゐと。表裏の違ひふるゞ如くふ

まども是ぞ天御祖神の始給へる祓の主意なりて深く妙なる謂ありけり。かくて此神終に
須佐之男命と共に根国に往坐しぬ。此由第七十九段に云を合せ考ふ
し罪穢を先受取給ふ幸魂瀬織津比咩神は本謂は
ふく永く祓戸を掌して其功を負し給ふ故に大祓詞
に先此神の大海原に持出給ふ由を云るなり。但し其や
祖神は御言依は傳へあることなるが如し。上に委く辨へ給ふ
は本因は大凡を思ふに五は別なり。一には禍津日神は
本體は夜見国に往坐まど。上第二十七段に云は如く其御靈
は亦は国土に充満給れば穢なるは忽に荒び給ふ禍
事二には此神の徳はいとも大なに廣く坐ませども實

はかの荒御魂に坐に故に好き御意を以て爲給ふこを
も自然に荒くなる。そは上件須佐之男命の御荒びの状を熟思ふべし。うれて惡き御心より
為給へるなれ非ざるをや。且其大きく廣き御功は好事なれ來
は惡事。其は韓国島に金銀ありとて皇美麻命に寄給へ
るは廣き御恵なるを韓王が畏みの餘りに種々
は物を貢れは中に国は害と。三には伊邪那岐命は脱棄
ある事も多きなど是れり。
給ふは穢物に因て生れる神等は爲に禍事。此事は上第九三段此神
とちの生れる処まと第四十三段万物之
妖とは云は処なども云るを合せ考ふべし。四には火神の
穢を惡給ふ御心をゆ起し給ふ災事。は第十八段豫
云るを合せ考ふて曉るべし。五には餘諸神とちは崇の禍事なども。
善神とちといふども御心にふさはば所思食に事は有
まで怒りて禍なるなし給ふこと第九七段荒御魂は処に

委く云るを合せ考ヘて曉ふべし。世ふ有もる禍事は本は。大凡此五柱ふ漏ふ〜おゆをおく所思ふ。とく思ひ。深く考へて辨べし。けてかく種〜は別ひをども祓事ふ依ては。皆解除るばき禍事どもれ。其は何ふまれ。禍事ハやゲて罪穢ふて。穢は豫美国ふ屬く理ふる故ふ。伊邪那岐命の。穢を惡み給ふ御靈ふを。て生坐ふ。瀬織津比咩神は。其を受持ふ。御自らふ係ふ係ふ係らを撰びおく。先受取て。豫毋都国は道筋ふる。大海原ふ持出給ふ。おを此神は。解除ふ功を爲し給ふ狀ふ。有ふ。師説と異ふり。大祓詞後釈を合せ考ふべし。けて祓を行ひて。罪穢を清め流出は。豫美国ふ逐ひ却る所爲ふふ故ふ。穢を惡む

此神は。先かく持出ふ。ひて。けて穢を清給ふ御靈の神。速開津比咩。禍を直し給ふ御靈の神。氣吹戸主。さし次て持送て。速佐須良比咩。其を根国ふ持ち出らひ失ひ給ふ。おをを解除は大旨ふて。天御祖命の御傳へ坐ふ趣おて。けふ。今おの事を爲むとは。祓具は。佐須良比咩神は如く。ヒゲ身は。須佐之男命は如しと心得べし。このくて此四柱の功。各く異ふは坐ませども。おを深く思ふ。此神ふち誰も餘三柱の御靈をも兼持給ひて。互ふ御靈幸ひて。祓の功を相成し給ふ中ふ。直毘神は。伊邪那岐命の禍を直さむと欲して。生坐る神ふる故ふ。おは御功は殊ふ大は。廣くいふ時は。早川の瀬ふ流を出るとゆ。根国

ゝ到ぴてさけらひ失るはで。都て此神は御靈ゝ非ざる事ゝきハ。更ゝも言は密。言もて行けぞ。始終八百万神とちは。神集〳〵て議ませはをゆ。祓竟とはまで。始終密ばをて。此神は御靈ゝをは事ゝゝゝむ有り。ゝゝ神武天皇巻ゝ委く云れバ此ゝハ要と云る事は大意を注のこれり。ちて速佐須良比咩神は。佐須良比とは流離字の意ゝるこ密。既ゝ云りき。其生坐の處ゝ云は如く。殊ゝ深き御鼻は穢は。流離出る時ゝ生坐して。其由を御名ゝ負坐し。實は須佐之男命は分魂ゝ坐まし。かく罪穢を。持佐須良比失ひ給ふ御功云は。須佐之男命は。此時逐ては給ゝきど。年久ちく此国ゝ坐まして。種〳〵の功を立給ゝると我合せて

按ふ。須佐之男命は犯し給へる罪をぞ。悉く此神は負持て。此時直ゝ。根国ゝ佐須良はれ往坐るゝは云はをし。事實とぴ云ときハ。須佐之男命は負給ふばき御名れるを。此神は負坐るは。幽き契云のる事ゝゝけぴ。上第九七段ゝ此神者。與速須佐之男命合力而座神也。と云は處ゝ云ゝりし說ども我。此ゝ思ひ合せて。此妙ゝは理を曉はばし。ゝゝゝゝのゝ言ゝは云ゝ得ゝのとゝ記事は云ぴのし。さて後世ゝ罪ゝ云る人を遠き処ゝ迁し却るを佐須良ふと云は。此古言の遺きはは知るべし。万葉三巻長歌ゝ。天有左佐羅能小野之七相菅手取持而久堅乃天川原爾出立而潔身而麻之乎。と云は。天上は故事を思ひて。詠るゝはゝ

を炳らまで。佐く羅之小野とて。此時佐須良比事を爲と
依野。と云意に名ふて。此野の菅を取て。解除事を爲て。ち
て天河原ゝ出立ち。禊を爲ば。といふ古傳に遺まる。本
おきて。詠依るばし。まゝ十六巻の哥ゝ天尓有哉神楽
乎立毛。と詠依て。多く小野良能小野尓茅草苅草苅婆可尓鶏
佐良之を云るふて。故実ゝ達冠り。此哥ゝ依て。佐く良之
小野と云べき序詞ゝ。天上ある佐
る。天有をいひ。菅を取て潔身安る由を云るもて。此時
に故事ゝ本おれる名ある事を思ひ決むべし。又按ゝ。已
已竹をさ〳〵らと云て。言の本ゝて。名義て。さ〳〵と鳴をり
云ひ。其を以て遊ふ故ふ。さにらふと云ゝや。彼
ものさ安をせち〳〵。を云ふち〳〵も。進むる意れり。ちて右長
歌ふ。天河原爾出立而。云く。を云る天川原て。決を。て彼安
河原のおとふて。此河原ゝて禊を爲し。彼千座置戸に祓

物も。此川ふ流し多已れむし。其思ひ合べき事ども
て。神武天皇巻。大祓詞。佐
久那太理の処ゝ。委く云ふを見るべし。或人云。天川を。安
河と云こと。多しゝふ見とる。何の書ゝ忘れとりと云
ゐ已。ちておろ。川原ゝ出て潔身おと依て。伊邪那岐命に。橘
之小戸ふて。禊祓し給へる故實ふ依を依御事ふ已れむ
おを。云も更ふ。かくて。此国の禊祓をも。川原ゝ出て
行ひ。それ祓物を。大川道ふ流に。おと
て。大祓詞ふ。天津宮事以氏とのまで。天上
に故実を效びとるおと。是まとおるし。ちて禊祓の事
は。上件祓戸神とち。四柱の御霊ふ賴て。祓ひ清むる事ふ
まで。上ふ使天兒屋根命。宣解除之太諄辭。とのに諄辭て。
必おに四柱神ゝ禱白に詞ふ已れむこを炳焉し。かくて
まる。後の大祓に神事も。此の天津宮事を以て爲る事ふ

まゞ。必此神とちふ祈白に。天津詔詞のふくてた有まじき理ありよ。其太祝詞は傳たらざるは。甚も歎かたたれ。悲きことあり。然ふを世は學者とちは。彼大祓詞を。やゞて神ふ白に詞れゆと思ひ居るたいと麁れ。かし。其た彼詞を熟〻〻讀考ふよ。上は小註よも。ろ〻〻云る如く。彼た皇美麻命の天降坐に。と。天御祖神の御言以て。葦原中国ふ。ならもふ天之益人等ふ。過犯せふ罪穢ならむ時。大祓事を爲て。解除却るぢき式法。天津宮事以氏と云とり。太祝詞乎宣礼と云ふまでよ。とく心を著て思ひ辨ふべし。まと其解除乃太祝詞を。天津神。国津神。祓戸神とちは。所聞食し受給ひて。罪穢を却ひ失ひ給ふ狀をも。御言依し。誨給へる事のまふ〻。此事を爲て。百官人。及四方国の人民は罪穢を。天皇命は。祓清給ふ由を集侍れる人〻ふ。宣聞に詞よおそ。ならを。神ふ白に詞よは非ざ。ばふ。其た彼詞の全文をあまあ〻び操返し読味ひ。餘は祝詞文とも合せ考るふ。神の御前ふ白に格は辞とてた。一言ざふ無。して。多く解除し給ふ故由為方。まと罪穢の清まる狀ふ。などを。天津神の依給へる御言よ言を加へて記されとふ。よて。集侍れる人〻よ。宣聞せ給ふ詞ふ。更ふ疑ふ。き趣れるを。其を委く言む〻。最初の文よ。天皇朝廷尓。仕奉留比礼挂伴男。手襁挂伴男。靫負伴男。劔佩伴男。伴男。能八十伴男乎始氏官〻尓仕奉留人等乃。過犯家牟雑〻罪乎。大祓尓祓給比清給事乎。諸聞食止宣と見え。終文ふも。大祓尓祓給比清給事乎。諸聞食止宣をあり。て。貞観儀式よ。称聞食刀祢皆称唯。とならを思ふべし。但し餘は祝詞ども。ふ。其を神ふ白しゝ〻も。参集る人等よも。聞べき由を宣ことも。ならを。其らと同じ趣ふ思ふ人必有ふ

れまど右のごとくひは白に祝詞はた其くの神は白に例の言れ有て紛る事おきを彼詞ゐた曾て然る辞れ無れば神ゐ白に詞おらぬこと疑おきもれぞ○是ゐ就て猶按ふは朝野群載ゐ彼詞を中臣祭文とて挙ゐるを有ゲ中ゐ式はた自今日始氏罪あかしこ文の異おるも止云罪波不在止高天原尓耳振立氏聞物止馬牽立氏と止云罪止云罪咎止云咎八不有止祓給ゐる文を自今以後遺罪止云罪咎止云咎八佐乎志加乃御耳乎比清給事祓戸乃八百万乃御神達八振立天聞食止申とゐ卍此れ師も加茂翁も言れゐる如く中昔の人乃古へれ事をも意を毋ゐらで謾ゐ詞を替と るもれおることも論おきぬれのら其れ式おる詞れ人人は宣聞ゑ詞はて神ゐ白に詞おゑぬとは心著ゑ人れ此詞をやゲて神ゐ白ゑ詞はせむとて替と依事とぞ思れる〳〵おゐ此外はも中臣祓抄をてゐる本どもゐも かく状は神ゐ白に詞のおと云るも多〳〵きど之れ後ゐ加ゐゑる文おゑまと決し〳〵きば祓戸神とちゐ白に太祝詞れ別は有ゐむを式はた載漏されゐゑおるおと疑おし其れ彼大祓詞ゐ大中臣云〳〵天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮とゐ卍て如此久乃良波と承ゐるゐ熟く心を著て思ひ辨ふゑし神ゐ白にべき祝詞を別は依し賜ゐゆしゲ漏と依おるおを更は疑おゐれもれをや若然らぞとせぞ太祝詞事乎宣禮とれ何を宣おとのせむ如此久乃良波と承と依れ必上ゐ宣ゑき祝詞れあ卍て其を宣竟ゐるを承て言へる辭おゑゐ〳〵それ宣べき祝詞の無我いゐゐゐせ事祝詞考は太祝詞事乎宣礼とて祝詞れ神は告る言おゐり是れ人の身滌祓れ事おまバ祝詞とハいれ詞とれみ云り さまぞ此ゐ天津祝詞をゐるは別ゐ神代をり傳はまる言ゐるおらむと云るれ非おうとて其を辨ゐられ師の後釈ゐも太祝詞事は卽大祓ゐ中臣の宣る此詞を指せる外り と解まゐれぞ共は考れ鹿〳〵りしおゐ卍考は言まし或人れ誰お

已に亡む。既に心よくも心よくき事なおむ言おき巻る。○或人あ
本舊説は泥みて、呼び説を信ずるに近く譬へて諭すら
くに、あるざくに呪禁の哥書て、人まおれに依と多、其せを
そこに呪ふべれ趣に云くれ事して、此哥を誦ぼし、かく
誦あらむまに、それ痛速は癒らむものぞと言おくゆあ
らむまに、使人途まて、其短冊を失ひ、せを拾おむ。ゆ已贈れ
るを、受と依人其ををみて、此哥を誦べしとは、即と此消
息の事ぞと云て、あるざくを取落しあるこをを、心著で
ちらむが如し、大祓詞の今きに、今さら言までに無きど、
も、彼太祝詞言れ、くてに、此せをそこに等しきこを、心
を平らに、ちて、
て熟思べし。ちて其漏あ依祝詞に。天御祖命に。大御口を
から傳坐るに。そに太祝詞事乎宣礼、如此乃良波、とに
傳坐依あこと、更る文意を、をく思ふべし、大御口を、ら
に疑れ、ものをや。祓戸神あちに。祈白に詞あ依を。神事
に多ら中に。禊祓に神事ぞの已重に無きど。天津祝
詞の多の依中に。此祝詞ぞ、ら重きは無く。天上に。此

時兒屋根命に宣給へ依辭も。其ふるぼく所思るに。餘の
祝詞に。悉く傳ハきに依中に。是のみ漏と依事に。悲しき事
に極に依故に。年頃いあく歎き思ひ已しを。猶深く考る
に。此に別に重き詞に依所由に依て。式まにわざと載漏
さきたに依て。然る例に、餘の詞まもあり。其ハ第百四十三段に云るを見べし。中臣家に
は。必ずきを傳られ、あらむと所思あ已。篤胤密に、其詞に彼るべきを得て、
此異ある処、まと誤きる言あどを、校正しとに依も有れど、
此に別に所由にりて、式に載泄されあるまや、とさ
思はるきど、此に記さむまと、容易げあに故に。此
詞のみに、姑く祕藏きて、傳ふべき人を待おむ。ちて大
祓詞を。上に引る歌共に。已て。解除事に故實を想ふに。
はず千座の置座に祓物を置足にして。祓戸神あちに手

向け。菅れ本末苅切て。其を手ゐ執ひ。彼太祝詞言を告て。罪穢を祓清米給れむとゐを。祝くて。菅を以て拂ひ却る事ゑ爲て。然ゑゐ事れ由縁を。集侍きゐ人くゐ宣聞せ。その宣聞れ詞を。即大祓詞ゐ。ちて河原ゐ出て身滌して。終こと。上ゐ委く論るゲ如し。

ふを其祓物を。悉く大川道ゐ持出て流し棄ゐ。是ぞ古へれ趣ゐひけゐ。後よを漸よ其趣も替きるを其れ儀式をり次く後書う見えさゐゲ如し。ゐを解除事の古とハ。神武天皇卷大祓詞の処よ。委く云ふを見るゐし。

○門人。北原信質。市岡殷成。岩崎長世等いふ。ゐきれ古史傳の。十二卷といふ卷を。かく木ゐ上せて。師の御もとゐ奉出せゐを。みぬの図れ道の中。中津川れうはやぢゐゑ

ゑる。河村秀豊と。同所のくゑしゐる。馬嶋穀生とぱのらひてゐひ。かくて九の卷よひ。ゐれ十二卷ゐいゐるまで。合せて四卷を。第三祓ゐあゐゐ一袤ゑに。長世信質等さらゐ云ふ。此四卷一書衣は。ゑ。もはらこの中津川ゐて成功ゐ。ゐらし。阿那米傳多。

彫工　木邨房義刻

伊吹酒屋先生及門人著述刻成出書目　塾藏版

○古史成文 神代部　三卷
○古史徵首卷 開題記四冊 神代系図一冊　凡五卷
○古史徵 神代部　六卷
○古史傳 自一至八　二帙
○神代系圖 折本 箱入　一帖
○同 懷中小折本　一帖
○同 掛軸　一幅
○每朝神拜詞記 詞正再刻 折本　一帖
○玉多須喜　十卷
○靈能眞柱　二卷
○入學問答　一卷
○太元圖說 石摺　一幅
○弘仁歷運記考　二卷
○万聲大統譜　一幅
○古道學神号 石摺　一幅
○天津祝詞考　一卷
○德行式 石摺　一枚
○立言文 石摺　一枚
○神字日文傳　二卷
○疑字篇 日文傳附錄　一卷
○皇國度制考　二卷
○古道大意 講本　二卷
○靜乃岩屋 講本　二卷
○醫宗仲景考　一卷

○皇典文彙　三卷
○古今妖魅考（全五卷之内）　三卷
○牛頭天王曆神辨　一卷
○童蒙入學門　一卷
○宮比神御傳記（附石階御神影）　一卷
○日女嶋考　一卷
◎出定笑語（附錄）　三卷

◎祝詞正訓　二卷
○大祓詞正訓（附天津祝詞祝詞文例）　一帖
◎赤縣歷代尺図　一枚
○神德略述頌　一卷
○天滿宮御傳記畧繪入　二卷
◎古學二千文　一卷
◎悟道辨　二卷
◎伊吹於呂志　二卷

○古史本辭經（在刻）　四卷
◎木匠祖神号　一幅
◎古道訓蒙頌　一卷
◎草木撰種錄　一枚
◎伊吹於呂志　二卷

先生の著書都て百部卷數千卷る近く既ふ刻成の物右れ如し但し百部れ内子孫ふのみ傳遺さ陶く物れ五部假る名けゑ内書と云同門篤志れ者るハ一覽を許されざるふ非ず其れ師家ふ就て問べし其餘七十五部假ふ外書と名ぢく此れ次く上術して同志る示爲し右内外の全書目う記其書等れ大意を知むと思むる人は別て記せる著述書目集と云もの一卷ふり就て見べし

門人　生田圖秀　河内盛征等記

195
34
111